

東西文学の暗合

著者	宮永 孝
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会志林
巻	65
号	1
ページ	98-33
発行年	2018-07
URL	http://doi.org/10.15002/00021379

東西文学の暗合

宮 永 孝

はじめに

一 シェイクスピアの名前の伝来

一 「心謎解色糸」(鶴屋南北作)——シェイクスピアの『ロメオとジュリエット』の翻案か

一 模倣文学か暗合か

モーパッサンの「帰郷」——テニソンの「イノック・アーデン」の模倣か

日本の古典・近代文学にみる一つのテーマ——消えた夫の帰還と女房の再婚

明治期の「帰郷」(モーパッサン作)の訳業

翻案小説「小 帰国」(モーパッサン原作
小栗風葉作)

むすび

はじめに

いまより筆者は、社会的、政治的、経済的、文化的にも異なる東西の国々の文学において、同時に起った類似の現象についてのべようとしている。いいかえると、それはなんの因果関係もなく起ったふしぎな現象であり、科学で説明できないものである。ここで問題として提出するのは、作品の中心をなす内容——“主題研究”“題材研究”のことである。

ドイツやフランスでは、この研究部門のことをつぎのように呼んでいる。

- (独) Stoffgeschichte (題材史)
- テーマトロジー
- (仏) thematologie (主題論)

民間文学が重要視されるドイツでは、題材史の研究はかなり開拓されている。が、フランスでは、主題論は文学的影響を考慮しないために、この学問は放棄されているという。⁽¹⁾

thematologie の語源は、ギリシャ語の *titheini* 「(問題など) 提出する」を意味する動詞の語根であるらしい。⁽²⁾

こんにち国籍を異にする文学相互間の交渉について、作品を並置し、異同を考究する学問のことを、フランスでは比較文学と呼んでいる。まず素材としてシェイクスピアの『ロメオとジュリエット』(一五九四〜五年ごろの作?)をえらび、文化七年(一八一〇)正月——江戸の市村座で上演された「心謎解色糸」(鶴屋南北「一七五五〜一八二九」の作。江戸後期の歌舞伎作者)との関係について論じてみたい。もっとも両作品の酷似点のひとつ——毒藥をのんで仮死して埋葬され、やがて生き返る——といったエピソードについては、これまで多くの研究者が、いろいろ書いてきたが、たしかな史的考証はまだなされていない。

一 シェイクスピアの名前の伝来

Shakespeare の名がいつごろわが国に伝わったのか。わが国の稿本にはっきりとかれの名前が現れたのは、ペリーの黒船が来航する約十年前——天保十二年(一八四一)のことである。当時、天文方見習であった渋川六蔵(一八一五〜五一、江戸後期の暦学者、のち書物奉行。幽閉先の豊後国臼杵で死没)は、つぎのような書名のオランダ書を和訳した。

ENGELSCH
SPRAAKKUNST,

DOOR

LINDLEY MURRAY,
TWEDE DRUK, NAGEZIEN EN VERBETERD
ZALT-BOMMEL,
JOH. NOMAN en ZOON.
1822

リンドレー・マレーの英文法。一八二二年ザルトーボメル書肆——ヨハネス・ノマン・エン・ゾーン社刊

注・ザルトーボメルは、オランダ東部——ヘルダーラント州の町。

原著者リンドレー・マレー（一七四五〜一八二六、アメリカの文法学者）は、スコットランド移民の子としてアメリカ・ペンシルバニアのランカスターの近くで生まれ、のちイギリスにわたり、ヨーク近郊のホールドゲイトでくらし、園芸や英語関係の教科書の執筆に従事した。“英文法の父”とよばれた。

このオランダ語訳の原本は、*Grammar of the English Language* (1795) であるという。⁽³⁾

渋川はリンドレー・マレーの英文法書を重訳し、『英文鑑』^{えいぶんかんがみ}（上編の語源^{エティモロジ}と下編の構文論^{スインタククス}——上下からなる）の訳稿を完成したのは、天保十一年（一八四〇）のことである。



文法学者リンドレー・マレー

筆者は、オランダ語訳の原本——*Grammar of the English Language* (1795) と蘭訳 *Engelsche Spraakkunst door Lindley Murray* (1822) の原本をまだ実見する機会にめぐまれていないが、オランダ語訳のあと版（一八五二年刊）を国立国会図書館でみることでできた。つぎのような書名の本がそれである。

ENGELSCH
SPRAAKKUNST,

DOOR

LINDLEY MURRAY,

MET TOEPASSELIJKE OPSTELLEN TER VERTALING.

TEN DIENSTE DER SCHOLEN EN DEROENEN, DIE DE ENGELSCH TAAI,

OF EENE SPOEDIGE WIJZE, GRONDIGE WILLEN LEEREN.

ZESDE DRUK, NAGEZIEN EN VERBETERD

DOOR

P. M. COWAN,

Lector aan het Gymnasium te Amsterdam.

— ◆ ◆ ◆ ◆ ◆ —

ZALT-BOMMEL,

JOH. NOMAN en ZOON.

1852

リンドレー・マレーの『英文法』。第六版。翻訳にさいして適当に配置しなおした。学校等において用いるもの。英語の基礎をすべて速習したいと望む人たちのもの。

アムステルダム^{さんせい}のギムナジウムの講師。ペー・エム・コワンによって刪正。一八五二年、ザルトーボメル^{さんせい}の書肆——ヨハネス・ノマン・エン・ゾーネン社刊。

この本は、たて約18.5 cmよこ12 cmの、黒・茶・白の水玉もようの装帖本であり、全二四二ページある。見返しに、

安政丙辰

ミユルライ著
コウハン

エンゲルセスブラックキユンスト
千八百五十二年

丙辰
全一冊
小

文 三番甲

とあり、蕃書調所の朱印がみられる。丙辰は安政三年（一八五六）のことであり、この年に購求したということか。
この版本の一六一〜一六二ページにかけて、シェイクスピア・ミルトン・ポープ・アディソン・スターンなどが登場するのである。文中にみられるアラビア数字（算用数字）は、原文の注をしめす。

De Engelsche taal heeft overloed van 1 *Schriften* 2, *gerigt* 3 tot de verbeelding en het *geloof* 4. De *vindrijke* 5 geest 6 van Shakespeare, de *verhevene* 7 *gedachten* 8 van Milton; de *Kracht* 9 en *harmonie* 10 van Pope; de *Kennigheid* 11 van Addison, en de *treffende* 12 *eemondigheid* 13 van Stern.

1 to abound in	4 feeling	7 sublime	10 harmony
2 writing	5 inventive	8 conception	11 delicacy
3 to address	6 powers	9 strength	12 pathetic

『英文鑑』の「下編 syntax 卷之一 第八」に、シェイクスピアの名前がみられ、カタカナで「シャーケスピール」と表記されている。
訳稿ではシェイクスピアの名前が出てくるオランダ文は、左記のように引用されている。また注のアラビア数字は、和数字（一、二、三など）に変っている。

第八

De Engelsche taal heeft overvloed van 一 Schriften 二, gerigt 三 tot de verbeelding en het gevoel 四・De vindingryke 五 geest 六 van Shakespeare, de verhevene 七 gedachten 八 van Milton, de Kracht 九 en harmonie 十 van Pope, de Keurigheid 十一 van Addison, en de treffende 十二 eenvoudigheid 十三 van Sterne.

この原文にたいする渋川訳は、つぎのようになっている。

人ヲ感^感セシメセシムル為ニセル 諸厄利亜語ノ書籍ハ夥^多ナリ (たくさんあるの意——引用者) 即チ「シャーケスビール」名^名人^人ノ「デ、フィンディンクレイク、ゲースト」名^名書^書「ミルトン」名^名人^人ノ「デ、フルヘーフェ子、ゲ、ダクテン」名^名書^書「ポーブ」名^名人^人ノ「デ、カラクト、エン、ハルモニー」名^名書^書「エッヂソン」名^名人^人ノ「デ、キューリフヘイド」名^名書^書「スチールン」名^名人^人ノ「デ、テレッフエンデ、エーンフォウジフヘイド」名^名書^書ナリ

この訳文は、よくわからない。迷訳というのか、でたらめの訳である。筆者のよみも怪しいが、原意はつぎのようなものであらう。

英語の書物には、想像力や感覚に打ったえるものがたくさんある。創作の才にめぐまれたシェイクスピア。ミルトンの高貴なる思想。ポーブの力と調和。アディソンの洗練さ。スターンのおどろくべき素朴さ。

渋川は、シェイクスピア・ミルトン・ポーブ・アディソンといった文人の特徴の説明を、すべてカタカナで表記し、“書名”として片づけている。これは肝っ玉のすわった豪傑訳といえる。

渋川の『英文鑑』は、刊行されず、翻訳をおえたとき三部浄書し、一部は幕府に献上し、一部は天文方の備本とし、残りの一部は家蔵本とした。幕府への献上本は、所在不明となり、天文方備本は蕃書調所——開成所——東京帝国大学へと伝わったが、関東大震災（大正十二年Ⅱ一九二三）のとき、第六卷一冊をのこし、全部焼失した。こんにち完本として残っているのは、渋川家の蔵本だけという。

さいわい大槻如電（一八四五～一九三一、明治～大正期の和漢洋学者）が翻刻した謄写版（百部印行、六合館、昭和3・12）があり、その「跋」^{ばつ}（書物のおわりに記す文）に、この訳稿がたどった運命がしるされている。

『英文鑑』以外に、シェイクスピアの名前が出てくる将来本はないか調べたら、つぎのような蘭書があることを知った。

THEORETISCH-PRAKTIISCHE

SPRAAKKUNST

DER

ENGELSCH TAAI,

DOOR

F. M. COWAN en A. B. MAATES

Derde Druk

Amsterdam

J. H. Gebhard & Comp.

F・M・コワン、A・B・マーテス共編『理論的——実的な英文法』（第三版）
アムステルダム・イエー・ハー・ヘブハルト社刊

注・この本には刊行年は印刷されていないが、一八六四年（元治元年）の印行のようである。

この文法書は、開成所の蔵本であり、いま国立国会図書館が架蔵している。

同書の三四ページに、シェイクスピアのことが出てくる。

Shakespeare is de grooste dramatische dichter, dien de wereld ooit zag.

《意》シェイクスピアは、かつて世界がみたこともない、最大の劇詩人である。

この文法書には、これ以外にも、シェイクスピアの名前やかれの文章がたくさんみられる。シェイクスピア以外の文学者として——トムソン、ゴールドスミス、フィルディング、ディケンズ、スターン、スコット、ギボン、マコレイ、フィルディング、ドライデンなどの名前が揚げられている。

†フレデリック・マーチン・コワン（一八二一〜？）は、ライデン大学で法学を修めたのち、アムステルダムのギムナジウムで英語や文学を教えた。一八六〇年ごろ、イギリスの箱館領事館付の通訳官となった。当時の英領事はホジソン。ホジソンは一八五九年十月六日（安政6・9・11）に到着し、フランス領事もかねた（『函館市誌』）。コワンは来日早々、函館において盗賊に入られている（安政6・10・17）。のちにコワンは神奈川のイギリス領事館にしばらくつとめた。

参考文献 川崎晴朗『幕末の駐日外交官・領事館』雄松堂出版、昭和63・3。

多田実訳『ホジソン長崎函館滞在記』雄松堂出版、昭和59・9。

Nieuw Nederlandsch biografisch woordenboek. Derde Deel.

A.W. Sijthoff's Uitgerers-maatschappij, Leiden, 1914

シェイクスピアの名前の表記の変せんを見ると、明治二十年ごろまで、カタカナと漢字が用いられている。幕末から明治初期の例をつぎに揚げてみよう。

シャークスピール……『英文鑑』（天保十二年＝一八四一）

沙士比……『暁咭喇紀略』（嘉永六年＝一八五三）

舌克斯畢……………慕維廉訳『英国史』（文久元年＝一八六一、溫和社）

舌克斯畢……………スマイルズ著『西国立志編』第一冊（明治四年＝一八七二）
中村正直訳

舌氏……………同右

舌克斯畢……………スマイルズ著『西洋品行論』（明治六年＝一八七三、珊瑚閣）
中村正直訳

シエクシビル……………The Japan Punch（明治七年＝一八七四）

沙士比阿……………『民間雑誌』（明治十年＝一八七七）

一 「心謎解色系」（鶴屋南北作）——シェイクスピアの『ロメオとジュリエット』の翻案か

シェイクスピアの名前の伝来の由来は、いまのべた通りであるが、竹村 覚（一九〇三～一九七〇、英文学者。早大文学部英文科卒。旧制中学の教諭をへて、久留米大学名誉教授）は、その著『日本英学発達史』（昭和8・9刊、岡倉賞受賞）において、「徳川十一代將軍家齊の時代に、既に Romeo and Juliet が上演せられ、非常な好評を博した事実が存している……（中略）文化七年（一八一〇）正月で、今から百二十三年前である。これは単に Shakespeare 劇が上演せられた最初であるばかりではなく、また英国劇が上演せられた最初でもある」と、『ロメオとジュリエット』が、わが国の芝居小屋で上演されたと断言している（沙翁篇 日本に於ける Shakespeare 劇の伝来について——一九七～一九八頁）。注・傍点は筆者による。

しかし、著者の説は、証拠に根拠をおいたものではなく、単なるおく測、思い込みにすぎないのである。

『ロメオとジュリエット』と「心謎解色系」との連関にふれた記事として、過去につきのようなものがある。

伊原青々園（一八七〇～一九四一、一高中退。明治から昭和期にかけての演劇評論家、劇作家。「日本に於ける沙翁劇」『早稲田文学』沙翁記念号所収、大正5・4）……これだけの筋を話せば、この劇が沙翁の「ロメオとジュリエット」の翻案であることは、誰にも考がつくでせう。ロメオが綱五郎で、おふさがジュリエット。そしてフライヤー・ローレンスの役を番頭と悪医者にとに仕組み、沙翁の原作で名高い墓堀の場が、南北一流の棺桶狂言になって、しかも原作では悲劇であるものを南北のでは、喜劇にしたなどすこぶる換骨奪胎（やきなおし）の妙をえております。

豊田 実^{みづ}（一八八五～一九七二、大正・昭和期の英語学者。東京帝大卒。九州帝大教授。「日本に於けるシェークスピア紹介の歴史」『文学研究』第一号所収、昭和7・3）……日本の洋学といえはまだ蘭学のひとり舞台であった文化七（一八一〇）年の正月、江戸の市村座で上演された『心謎解色糸』といふ勝俵蔵（のちの鶴屋大南北）とシェイクスピアの『ローミオ・アンド・ジュリエット』との間に、かなりの類似点のあることが、批判家の注意に上っている（ここで豊田は、伊原青々園の「日本に於ける沙翁劇」に言及）。

豊田 実「日本に於ける英文学研究」『日本英学史の研究』所収、岩波書店、昭和14・2）……文化七年（一八一〇）正月江戸市村座で上演された『心謎解色糸』とシェイクスピアの『ローミオ・アンド・ジュリエット』との関係も論ぜられているが、的確な史的考証はなはだ困難である（二六〇頁）。

河竹繁俊^{しげとじ}（一八八九～一九六七、大正・昭和期の演劇学者。早大文学部英文科卒。文化功労者）の「解説」『日本文学大成 第三十六巻 鶴屋南北集』所収、地平社、昭和23・7）……お房が毒薬によって仮死状態に陥り、墓所で蘇生するといふ着想も特異なる挿話である。シェークスピアの『ロミオとジュリエット』で、ジュリエットが毒薬で仮死状態に入り、墓所で覚醒するといふのと、だいたい同じ行き方なので、この話を取り入れられたのではないかの説が行はれてゐる。けれども、これには何等確証のあるわけではない。それは『ロミオとジュリエット』の話が、西欧から江戸時代に長崎に伝へられたことも想像されないではないが、暗合^{あんごう}（偶然の一致）とも考へられるし、永久に解けない謎といふのはあるまい（五頁）。

河竹繁俊「日本におけるシェークスピア上演史」『シェイクスピア研究資料集成 第21巻』所収、日本図書センター、平成9・11）……「心謎解色糸」これは鶴屋（大）南北の書いた歌舞伎脚本で、文化七年に江戸の市村座で初演された。これも「ロミオ」に似ているところがあるので、注意されている。

この作中にお房という娘があつて、自分にはひそかに思っている男があるのに、金のために他家へお嫁に行かせられることとなって、毒薬を飲んで仮死の状態に陥り、墓所へ埋められる。それが程^{ほど}へて掘り出され、蘇生用の薬をのまされて生き返へる、とそれが思う男だったので、連れて逃げてもらうという筋がある。即ち、毒薬を使って仮死して葬られ、やがて生き返るという、ジュリエットの場合そっくりで筋が似ているからである。しかし、これにも何ら確認はない。まだ「ロミオとジュリエット」と明記がなくとも、西洋の物語を聞いて書いたのだといった文証も、発見されていないのである。



前口上をのべる図。

いま影響ということばを排し、シェイクスピアと鶴屋南北の兩作品における同類、近似という点から、類似点の異同を考察してみよう。まずシェイクスピアの『ロメオとジュリエット』の梗概を略記してみる。

コーラスの登場。ヴェロナの二つの名家の確執とそれらの家に生まれた者の薄幸の恋をつげる（前口上^{プロローグ}）。

ヴェロナの路上。

キャブレットとモンタギュ兩家の家来が、飼犬のことでけんかとなり、主人同志の争いに発展しそうになったとき、ヴェロナ公の家臣が間に入り、ことはおさまる。このころモンタギュ家のロメオは、かなわぬ恋にもんもんとしている（一幕一場）。

ヴェロナの路上。キャブレットとパリス（ヴェロナ太守の親戚）の登場。パリスはかねてキャブレットの娘ジュリエットに結婚を申し込んでおり、親にその返事をうながす。キャブレットは、今夜家で宴会をもよおすから、出席者の女性のなかから、いちばん気に入った女をえらびなさい、という。キャブレットは招待客のリストを家来にわたすと、パリスとともに退場。

ロメオとその友ベンヴォリオの登場。二人はこんやキャブレット家で宴会があることを知り、仮装してこっそりそれに出席することに決する

（一幕二場）。

キャブレット家の屋内。

キャブレット夫人は、娘ジュリエットに、パリスから結婚の申し込みがあったから、宴会のとき、相手の顔を一卷の書物のようによくみて、好きになるようにって聞かせる（一幕三場）。

路上。ロメオ、マーキュウシオウ、ベンボウリオうらは仮装して登場。ロメオは昨夜わらい夢をみたから、不慮の死をとげるのではないかという（一幕四場）。

キャピュレット家の広間。

召使いらが食事のあとかたづけをおえたところへ、キャピュレットが他の家族らと登場し、仮装者を歓迎する。ロメオは騎士と手をとっておどっているジュリエットを目撃する。ティボルト（キャピュレット夫人のおい）は、声によってロメオだと知り、斬ろうとする。が、キャピュレットは、祝宴のさいだから放っておけという。

ティボルトは、あんな野郎が客なら、けしからんといって退場。巡礼者に変装しているロメオは、ジュリエットに近づき、二人はキス問答をしているうちに、恋に落ちいる。そのとき、乳母が母上さまがおよびです、と彼女を呼びにくる。

ジュリエットが去ったのち、ロメオは乳母から、彼女は当家の娘であることを知っておどろき、この命は敵へ質にとられたといつてなげく。ジュリエットも客の去ったあと、乳母からロメオの正体を知っておどろく。そして、たった一度の恋が、たった一人の敵から生まれ、なぜにくい敵に恋をせねばならぬのかとなげく（一幕五場）。

コーラスの登場。相思相愛の二人は、危険のなかであいびきをたのしむことになったことを告げる（第二幕——序詞）。

キャピュレット家の庭園に沿った小道。

マーキュウシオウとベンボウリオウ（兩人はロメオの友人）は、ロメオの名を呼び、すがたを見せろと叫ぶが、返事はない。いまごろは女と会っているだろう。人目をしのぶひとの恋はうっちゃって、おれは家に帰って安ベッドで寝るんだ、とマーキュウシオウはいふ。さあ、帰ろう、といて二人は退場（二幕一場）。

キャピュレット家の庭園。

ロメオは夜陰に乗じて、庭園に忍びこむ。ジュリエットは、バルコニーに姿をみせ、ロメオにたいする恋々の情を吐露する。彼女はロメオさん、そんな名前を脱ぎすて、わたしという者を受けとって下さい、という。それを聞いたロメオは、おことばどおり、受けとりましょう、といって姿をあらわす。ジュリエットは、死の巷にやってきたロメオの身を案じ、奥からよぶ乳母の声に、二人の会話はさえぎられそうになる。

ジュリエットは、愛する気持にうそがないなら、明日使いをだしますから、いつ結婚式をあげるつもりなのか、その者に返事をことづけて欲しいと、ロメオにたのむ（二幕二場）。

ローレンス修道士（フランシスコ会）の薬草園。

早朝、この修道僧が菓草をとっているところへ、ロメオが姿をみせる。ロメオはジュリエットと相思のあいだになったことをローレンス修道士につげ、きょう式をあげることに同意して欲しいという。僧侶はロザラインという恋人をすてて、ジュリエットに心変りしたことにおどろいたが、この縁談がまとまれば、両家の遺恨を一変させるかも知れぬとおもう（二幕三場）。

路上。

ベンボリオウとマーキュウシオウ登場。二人は昨夜ロメオがどこに行方^{ゆくえ}をくりましたのか、またティボルトから決闘の申し込みがあったことなどを話していたとき、はらわたを抜き取られたイワシの干物みたになったロメオがやってくる。かれはマーキュウシオウと冗談をいっていると、ジュリエットの乳母が下男のピーターをつれて、ロメオをさがしにやってくる。

マーキュウシオウは乳母をからかいながら、ベンボリオウと退場する。ロメオは、きょうの午後、ローレンス修道士の独居房で告解式と結婚式をおこなうから、お嬢さんに坊さんのところまで来るようにいって欲しい、といって、乳母に金をにぎらせる。また闇にまみれてジュリエットと会うために、召使いにナワばしごを持たせてやることにすると語る。やがてロメオは退場（二幕四場）。

キャピュレット家の庭園。

ジュリエットが使いの婦りを待ちこがれているとき、ついに息を切らした乳母とピーターがもどったので安心する。乳母はロメオのことをつまらぬ男とけなすが、ローレンス修道士のところにすぐ行けという（二幕五場）。

ローレンス修道士の独居房。

ローレンスはいう。はげしい飲びは、はげしい終りを告げる、と。適度に恋すれば、それが恋をながつづきさせる方法だと。やがてジュリエットがやってきて結婚式をあげる。

町の広場。

マーキュウシオウとベンボリオウが冗談をいい合っているところに、ティボルトらがやってくる。マーキュウシオウとティボルトとが言い合いになろうとしたとき、ロメオが通りかかったので、きさまの侮辱はゆるせぬと、ほこ先をロメオにむける。ロメオは君の想像もおよばぬほど君を愛している。愛する理由はいまにわかるだろう、といって、暗にジュリエットと結婚したことをにおわすが、相手にはそんなことばの裏がわかるはずはない。

ティボルトはますます興奮してきたので、ロメオに代わってマーキュウシオが相手になろう、といって、ティボルトとけんかになり、かえって刺されて倒れる。ティボルトは味方の者たちと逃げてゆく。ベンボリオウオはマーキュウシオを介抱しながら去るが、やがてもどって来ると、気丈なマーキュウシオが死んだと告げる。それを聞いたロメオは、怒りにもえ、ふたたび登場したティボルトとけんかになり、剣で相手突きたおす。ベンボリオウオは、ロメオにつかまったら、死罪をまぬがれまいから、早く逃げる、という。

市民がさわぎ立て、家臣をともなったヴェロナの太守、キュピュレット夫妻、モンタギュー夫妻その他が登場する。

ベンボリオは、太守にことの次第をかたる。太守はけんか両成敗により、ロメオを追放処分にする（三幕一場）。

キャピュレット家の庭園。

しばらくジュリエットの独白がつづく。そこへロメオからあずかったナワばしごをもって乳母が登場。彼女はティボルトの死んだこと、ロメオが追放になった旨をつげる。ジュリエットはいとこのティボルトの死をなげき悲しむが、やがて乳母に、ローレンス修道士のところに隠れているロメオにこのゆびわを渡し、いとまごいに来るように伝えてくれという（三幕二場）。

ローレンス修道士の独居房。

ロメオは追放処分になったと聞いて周章狼狽する。かれはあお向けに倒れ、髪をかきむしり、狂い乱れる。そして、流刑より死刑のほうがましだという。僧がそんなロメオをなぐさめるのに苦労しているとき、ジュリエットの乳母がやって来て、ゆびわを渡して去ってゆく。乳母の話だとお嬢さまもうろたえ、ただ泣いているばかりだという。

ローレンス師はロメオに、お前の気持ちがいじみたふるまいは男らしくない。ティボルトを殺して、死刑にならなかつただけでもよろこべ。マントヴァ（イタリア北部ロンバルディアの町）で暮らし、その間に折をみて、太守の赦免を願ってやる。こんやはジュリエットにいとまごいに行け、という（三幕三場）。

キャピュレット家の一室。

キャピュレット夫妻とパリスの登場。キャピュレットはパリスに、思いきって娘を差しあげましょう、という。結婚式は木曜日ということにしましょう。血筋のティボルトが殺されたばかりですから、式はごく簡単にしましょう、という。そして妻には、寝るまえにジュリエットのところに行つて、その旨を伝えるようにいう（三幕四場）。



ジュリエットがローレンス師に、結婚の阻止を相談する図。

The works of W. Shakespeare. The John C. Winston Co. Chicago, 刊行年不詳より。

ジュリエットの部屋の窓。

夜が明けるにはまだ間がある。ロメオとジュリエットは、別れをおしんでいると、乳母がやってきて、奥方がこの部屋にやってくるという。ロメオはなわばしごとをおりて去ってゆく。

母親は、娘がいつまでもこの死をなげき悲しんでいると思い、仇を討ってやるという。それはそうとし、お前に吉報をもってきたといい、こんどの木曜日の朝——聖ピーター教会で、パリス伯との結婚式がおこなわれると告げる。ジュリエットは、夫になる人が求婚もしないうちにお嫁になんか行きたくはない。パリスさんよりロメオのほうがましだという。

そこへ父親がやってくる。父親は娘が良縁をよろこばないことに腹をたて、いうことを聞かぬのなら勘当するといい、退室する。ジュリエットは、母親に家から追い出さないでくれとたのむ。母親は娘にかってにおしとって退場する。乳母はロメオは追放になったのですから、パリスさんといっしょになるのがいちばんよいと勧める。八方ふさがりになったジュリエットは、ローレンス師に助けをもとめに行く（三幕五場）。

ローレンス修道士の独居房。

パリスは、ローレンス師に木曜日の挙式について語っていたとき、ジュリエットが姿をみせる。パリスは彼女とそれほど親しい間柄でもないのに、なれなれしい口をきいたのち去ってゆく。

ジュリエットは、結婚を食いとめる方法がないとしたら、この短刀で自害するしかありません。何かすぐに役立つ知恵をさずけて下さい、という。ジュリエットの苦衷を察したローレンス師は、人間を四十二時間仮死の状態におく“蒸留酒”のビンをあたえ、明日の晩のむようにいう。家の者は、朝死んでいる娘をみて動転し、遺体を、地下納骨所にはこぶであらう。

その間にロメオにこちらの意向を知らせ、あなたが眼がさめるまでここに来るよう計らいましょう、とローレンス師はいふ（四幕一場）。

キャピュレット家の一室。

あるじは召使いのひとりに、腕のよい料理人をやとってこいと命じていると



ジュリエットが毒をのむ図。

き、ジュリエットはなにくわぬ顔をして戻ると、仰せに従うように修道士さんから申しつかってまいりましたという。これからはお父さんのいうことに従いますという。それを聞いて父親は大いによろこび、明日の挙式の準備をうながすためにパリスの家におもむく（四幕二場）。

ジュリエットの居室。

乳母や母親がやってくるが、二人を退け、ひとりになる。彼女はこの“混合薬”がきかないとどうなるか。ローレンス師への疑惑、墓地の空気と亡霊の出現などに対する疑心暗鬼などにさいなまれ、なかなか蒸留酒をのむことができないが、いとこのティボルトの幽霊がロメオをさがしに来た幻をみて、「ロメオさん、あなたのためにこれを飲みます」といって、一氣にのみほし、ベッドの上にたおれる（四幕三場）。

キャブレット家の居間。

キャブレット夫妻は、召使いたちをうながし、明日の婚礼の料理の準備に余念がない。やがてパリスが音楽隊とともに間近にやって来たようなので、キャブレットは乳母にジュリエットを起すように命じる（四幕四場）。

ジュリエットの部屋。

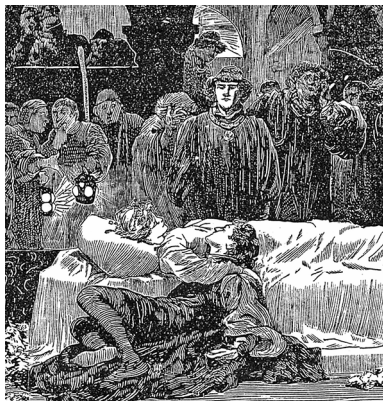
彼女を起しに行った乳母は、彼女が死んでいるのを見てびっくりし、家中大さわぎとなる。キャブレット夫妻が悲嘆にくれているところへ、パリスがやってくるが、同人も大いに失望落胆する。ローレンス師は、さわいでも死んだ人間が生き返るわけでない、といい、葬式の準備をうながす（四幕五場）。

マンチュアの往来。

ロメオがさっきみた夢は、吉報の前兆とおもっているところへ、召使いのバルサザーがやってきて、ジュリエットが亡くなったことを知らせる。ロメオは、今晚ここを発つから早馬を用意せよと命じる。かれは貧しい薬売りから、国禁の劇薬を買う（五幕一場）。

ヴェロナの町。ローレンス師の独居房。

ローレンスは計画をしるした手紙をジョン師に持たせてやったのだが、同行の修道士が疫病患者を訪ねたために、町の検疫官から足どめされ、



坪内雄蔵訳『ロミオとジュリエット』最終場面の図。早稲田大学出版部，明治43・9より。

使命をはたすことができなかった。ローレンス師は、ジュリエットが三時間以内に眼をさますことがわかっていたから、霊廟に出かける（五幕二場）。

墓地。

たいまつ、花束をもった召使いとパリスがやってくる。パリスは花束を捧げようとする、ロメオがたいまつ、つるはしをもったバルサザーとともにやってくる。ロメオはバルサザーを遠ざけ、墓の扉をあけようとする、パリスが姿をみせ、大さわぎとなる。二人は剣を抜いて戦うが、パリスはロメオによって討たれる。パリスはいまわのきわに、ジュリエットのそばに置いてくれという。

ロメオはその願いを聞きいれ、パリスの死体を霊廟の中におくと、ジュリエットの死体のそばで毒をのんで死ぬ。そのとき墓地のむこうから、カンテラ、つるはし、くわをもったローレンス師がやってくる。かれは廟の中に入ると、ロメオもパリスも死んだことを知って動転するが、外で人声がしたので逃げだす。

そのときジュリエットは眼をさますが、ロメオが自殺したことを知り、かれの短剣をもってじぶんを刺し、ロメオの死体に折りかさなって死ぬ。やがてさわぎを聞きつけて、夜番・ローレンス師・太守と従者・キャピュレット夫妻、モンタギューその他がやってくる。ローレンス師、バルサバルらは、ことの顛末をかたる。太守は、こんな悲劇が起ったのは、キャピュレットとモンタギュー両家が憎しみあっているから、天罰が下ったのだという。またお前たちの不和を見逃していたじぶんも近親（マールキュウシオウ、パリス）を失ったが、これも天罰だという。

そしてこのジュリエットとロメオの物語ほど悲痛なものはないといって、幕はおりる（五幕三場）。

シェイクスピアの『ロメオとジュリエット』との関わりで鶴屋南北の『心謎解色系』について説明しておこう。この芝居は、筋もかなりこんがらかっている（河竹繁俊）⁴。ひどく入り組んだ筋のもので、ここに簡単にかいつまむわけにはゆかないという（本間久雄）⁵。しかし、この物語は、つぎのように三つの筋に分けられるという。

一 芸者のお糸とトビの者——お祭り左七の恋愛事件。

二幕目。
日本橋本町・糸屋の店先。



江東区門前仲町にある“黒船稲荷”（鶴屋南北の終えんの地）。



江東区教育委員会による案内板。

[平成3・3]

二 本庄綱五郎と糸屋の娘・お房との恋愛事件。
三 この両方からんでいる赤城家の色紙紛失事件。
シェイクスピアの『ロメオとジュリエット』の——第四幕から第五幕にかけての部分——と鶴屋南北の「心謎解糸」の——第二の筋（第二幕から第三幕にかけて）——との暗合、いいかえると、類似的現象をいま考察してみよう。
この筋の理解を容易にするために、まず主なる登場人物を先にかかげることにする。

お房……………日本橋本町——糸屋・中根屋のむすめ。姉の小糸は、赤城家へ女中奉公にあっていいたとき、家来の半時九郎兵衛いうサムライとかけおちし、行方不明になる。
おりつ……………お房の母親。糸屋の後家。おとこ親がいないので、急にお房にむこをとろうとする。
おこの……………仲人。
佐五兵衛……………糸屋の悪番頭。この者はお房に横恋慕している。祝言の席で、酒のなかに毒薬を入れて、お房を仮死状態におちいらせる。
東林……………悪医者。毒薬を番頭にわたす。
本庄綱五郎……………浪人の占い。夜ごと糸屋の店のうらで八卦見をやり、細々とくらしている。お房はこの男にひそかに恋をしている。
お時……………半時九郎兵衛の女房。じつはお房の姉・小糸。
神原屋左五郎……………お房のむこ。

番頭の佐五兵衛は、帳場でしごとをしている。そこに医者の東林が番頭の健康状態をみるためにやってくる。ほどなく女あるじ——おりつが町役人のご新造（おこの——町屋の富貴な妻）とその召使をともなつて帰宅する。やがて医者、番頭、おりつ、おこのらは奥にはいる。

奥ざしきで、おこのは地べた（地面）つきの婿入りむいりの話を切りだす。またおりつは、夫が存生のころ、娘のために百両の化粧料（持参金）を用意していたことを語る。おこのは、お房さんはお留守ですか、と尋ねると、店の者が西河岸にしがしの地蔵まいりに行ったと答える。

そんなとき、お房が帰宅する。おこのは母のおりつさんと相談していた婿とりむとりの件でやって来たといい、今夜にでも仮祝言しようと、その相談に来たという。それを聞いて、お房はいやだという。そしてその場を立ち去る。そこでおこのは、まあわたしにまかせてほしい、支度だけはしておいて下さい、といって奥のほうに行く。

番頭は、

（とんだ話になってきた）

と思ひながら、タンスの引出しをそつとあけ、お房への金百両のゆずり状を盗み、主人の言いまわしをまね、糸屋の身代、家屋敷はこの佐五兵衛へゆずる、といった文章を書こう、かと思つていたら、人声がしたのでうろたえる。

そこに現れたのは、医者の東林。かれはこのあいだたのんでおいた後家の件はどうなったかという。番頭はそれどころではない。今夜、むこがくるという。そしてたのんでおいた毒をうけとる。かれは今夜やって来る入りむこにそれを飲ませるといふ。東林はかりにむこがその毒で死んでも、親類の者が不審におもうだろう。だれにも疑いがかゝらないのは、お前がほれてゐるお房だけであり、その者に毒をのませるのがよい、という。番頭はお房を殺すくらいなら、お前に毒をたのまぬという。

東林が調合した毒というのは、家伝の毒であつた。

斑猫はんみよ（ハンミヨウ科の甲虫。本州以南の低山地に分布する体長二センチほどの毒虫）

水蛭すゐてつ（血を吸うヒルの漢名）

ほうきう（不詳）

などを混ぜあわせたものであつた。

その混合済を酒のなかに入れ、お房にのませ、死ねば弔いをおこない、のちよみがえらすという。

やがてむこの神原佐五郎がやってくる。かれは番頭に、商いのことはまったく知らないから、万事よろしくという。それにたいして番頭は、きむすめを手に入れたうえ、若い後家までこけにするおつもりか。この糸屋の店では、わずかの金であっても自由にさせませんから、さよう心得えて下さいという。

そこへ丸綿（花嫁のかぶる綿帽子）をかぶり、しろむく姿のお房と友人のおせんが、三万（四角の台）におみきをのせて出てくる。

お房はこの縁談に不承知であったが、まわりから仮祝言をしつこくせきたてられるので固めの杯をのむ。するとたちまち苦しみだし、居間に床をとる。むこ入りを予定されていた佐五郎は、それを見て、

（お房に情夫がいて、この祝言のじゃまをするため銚子に毒を入れたにちがいない。おれもあやうく毒をくらうところであった）とおもう。

台所の場合。

おりつは、内祝言の晩に娘が苦悶しているのを見て、もう助からぬ、と泣いている。おりつは、娘にもしものがあったら、婚礼のしたく金百両を寺に納めるという。

それを聞いた番頭は、胸に一物があるから、こんなことをいう。——そんな大金を寺にやっても何の役にも立たない。なまぐさ坊主が、その金で女におぼれるようなことになる、かえって仏のためにならぬ、と。

その金はお房の首にかけてやり、髪をそらず、衣服もそのままにして埋葬するのが良策という。

本町の夜景。

糸屋の裏手——。お房が惚れている浪人・本庄綱五郎が、机のうえに小さな行燈をともし、辻八卦に出ている。この綱五郎は、藤原定家（一一六二—一二四一、鎌倉前期の歌人）の色紙（和歌をかけた四角の厚手の紙）をなくしたために浪人となった事情があった。その色紙はある質屋に入っており、その質物を受けだすには二百両が必要であった。

この八卦見（うらないしゃ）が客を待っていると、糸屋の小僧と魚屋の勝が姿を見せる。魚屋はこしょうの粉と気つけ薬をまちがって買ってきたために、こんな粉薬は吸物にも入れられぬといい、捨ててしまい退場する。

うでもよいからいっしょに連れていってくれという。綱五郎はやむなく連れてゆくことを約束する。

そこへ悪党の番頭が、お房の首にかけた金を盗もうと忍びよってくる。が、卒塔婆がまちがっているため、あとからかつき込まれた棺おけを開け、こしょうの粉を気つけ薬とおもって口うつしに飲ませようとすると鼻に入り、セキをしてしまう。そして手おけの水をのませてやる。

が、死体の女は氷のようにつめたくなっているばかりか、百両入りの袋はなく、代りに大福モチを二つみつけただけで、医者にだまされたと思いい泣声になる。

五幕目の大切り（大詰）は、綱五郎が念願の色紙を手に入れ、お房と夫婦になる。

シェイクスピアの『ロメオとジュリエット』では、話のゆきちがい（くいちがい）から、この戯曲は悲劇でおわっている。が、鶴屋南北のこの作品では、喜劇に仕組まれている点にちがいがある。

つぎに『ロメオとジュリエット』と「心謎解色系」の両作品にみられる同じもの——人物をとりまく周囲の事情、挿話、情景など——を一覧表にしてみよう。

『ロメオとジュリエット』

「心謎解色系」

パリス（ヴェロナ太守の親戚）は、かねてジュリエットに求婚している。
彼女の両親にその返事をうながす。

糸屋のむすめ（お房）は、母親からむこを取るよううながされている。

ジュリエットは、ロメオを見そめる。

お房は占師・綱五郎に恋心を抱いている。

ジュリエットは、父親の一存によって、婚礼の日をきめられてしまう。

糸屋のむすめは、母親と仲人によって仮祝言の日をきめられる。

ジュリエットから結婚を阻止する相談をうけたローレンス修道士は、

糸屋の番頭は、医者からひとを仮死状態におく毒薬をもらい、それを

ひとを仮死状態におく蒸留酒を彼女にあたえ、のむようにいう。

ジュリエットは、結婚式の前夜、じぶんの部屋でその酒を一気にのむと、ベッドのうえにたおれ、亡くなる。

彼女は時間がたてば、蘇生することを知っていた。

追放中のロメオのもとへ、ローレンス師の計略をしるした手紙をもった使者がむかうが、使命をはたせなかった。

ジュリエットの亡きがらは、墓地にはこばれる。

ジュリエットは仮死状態から自然に目をさます。

ロメオはジュリエットが死んだとおもい、毒をのんで自殺する。

お房にのませ、仮祝言のじゃまをする。

お房は仮祝言のとき、毒入りの酒をのむと苦しみだし、居間に床をとったのち、亡くなる。

彼女は何もうらの事情を知らずに、毒をのまされる。

お房の亡きがらは、墓地にはこばれる。

お房は気つけ薬をのまされ、天水（雨の水）とによって目をさます。

お房はおもいびとの占師と夫婦になる。

これらの二作に共通してみられる興味ある点は、なんといっても毒物によって仮死状態になり葬られようとした者が生き返る、という話のしくみである。毒物についていえば、『ロメオとジュリエット』では、

distilled liquor drink (蒸留酒)

mixture (混合薬)

poison (毒物)

といったことが用いられ、一方「心謎解色系」では、

三味（さんみ）（ハンミヨウ科の毒虫、ヒル、ほうきうから成る混合済の意）



ローレンス修道士

が、毒物となっている。

また婚礼や仮祝言のじゃまをすることに大きな役割をはたす登場人物として、

ローレンス修道士

番頭・佐五兵衛

医師・東林

などがある。ローレンス士は善人とすれば、番頭や医者が悪人にしくまれている。

生き返らせるところである。

評者の中にはこの二点に注目し、シェイクスピアの作品が日本を代表する狂言作者・鶴屋南北の作に影をおとしており、「心謎解色系」が、『ロメオとジュリエット』の翻案（原作の内容を改作したもの）であると考える者がいた。

翻案説をとった者は、

竹村 寛 伊原青々園 本間久雄

ら三名である。いずれもワセダ派の学者たちであるが、帰結点はみなおなじなのである。

竹村は家齊の時代に、すでに『ロメオとジュリエット』が上演された、とはっきり言いきっている。が、その断定の基礎を実証的に説明していない。伊原は「心謎解色系」は、『ロメオとジュリエット』の翻案だという。鶴屋南北にこの材料を提供したのは、蘭学者の平賀源内や桂川甫周^{はしゅう}としたしかった俳優の尾上松助であったと推測している。尾上はこの二人の友人から、シェイクスピアの芝居のことを聞きかじったのではなからうかという（日本の『ロメオとジュリエット』『演劇談義』所収、岡倉書房、昭和9・4）。

本間も明言している。シェイクスピアの原作の第四幕から五幕にかけての部分で、大南北は「心謎解色系」と題する作のなかに借用している、と（「大南北と『ロミオとジュリエット』」新修シェイクスピア全集 別冊 月刊特別附録『沙翁復興 第二号』所収、中央公論社、昭和10・5）。

この三人の説は、いずれも論拠があやふやであり、そういう結論になった道筋^{みちすぢ}を示さずにいる。すなわち三人ともあて推量でものをいっているのである。おなじワセダ派の明治文化研究家の柳田 泉（一八九四～一九六九、早大教授）によると、竹村・伊原両人の翻案説は、そう手軽には

成りたつものでないという。『ロミオ』と「心謎」^{（こころのなぞ）}が似ているだけでは、翻案説は成立しないからである。

シェイクスピアの『ロメオとジュリエット』が、わが国に移入されたことを示す明確な資料があるわけがなく、あてずっぽにとどまる、という。だからわたしとしては首肯^{（しゅくへん）}されない（もっともだと認められぬ）といっている（『本邦・沙翁劇翻案史』『沙翁復興 第二十号』所収、中央公論社、昭和10・5）。

竹村はシェイクスピア劇が日本に伝来したと、主張する一方で、伊原は翻案説をとねえたわけである。が、かれらの言説のうらには多少理由があったかと思われる。とくに竹村の大胆な推測の根拠となったものは、——太田南畝^{（ななほ）}（一七四九〜一八二三、江戸後期の文人）の記事（『増訂一話一言』『獨山人全集 巻五』所収、吉川弘文館、明治41・8）、『長崎市風俗編』（『二人獵師渾売娘』^{（かりうしちちうりむすめ）}を収録、大正14・11）、『啁蘭演戯記』^{（おらんだ）}（二つの芝居——『二人獵師渾売娘』と『オンヘデュルディヒ（性急者）』の筋書を収める。『海表叢書 巻二』所収、更生閣書店、昭和3・1）——などの文献であったかと思われる。

「二人獵師渾売娘」は、パリ生まれのフランスの劇作家ルイ・アンソーム（一七二一〜一八四）の「二人の獵師と乳売娘」とラ・フォンテーヌの寓話「熊と二人の仲間たち」「ミルク売り娘とミルクの入った壺」に基づいたものであった。この作品をオランダ語に訳したのは、フィリップ・フレドリック・レインスラーヘルである。

「オンヘデュルディヒ（性急者）」の原作は、フランス人のエティエンヌ・フランソワ・ド・ランティエ（一七三四〜一八二六、フランスの作家、劇作家、劇作家）が著した「ランパシアン（短気な男子）」（一七六八年の一幕ものの喜劇）という。「性急者」の原作者をつきとめたのは、中央大学教授・中村洪介（一九三〇〜二〇〇一、西洋音楽史研究家）である。この作品は、ピイテル・ヘラルドゥス・ウィステイン・ヘイスベーク（一七七四〜一八三三、劇作家・翻訳家）によってオランダ語に訳された。

これら二つのフランス芝居が、文政三年（一八二〇）八月から九月にかけて、出島の花園にある「賭博場」^{（スベールハイイス）}（細長い木造の二階屋であり、玉つきなどができる）において、長崎奉行二名を招いて四回上演された。^{（6）}

ときの商館長は、わが国の英語研究の端緒をひらいたヤン・コック・ブロンホフであった。英語や英文学に造けい^{（さ）}が深いと考えられるブロンホフは、出島において『ロメオとジュリエット』を選んで上演したかも知れぬ、と考えられた。竹村は「かれが英国劇を選んだであらうこともまた

十分想像せられることである」としている（『日本英学発達史』、二〇一頁）。

出島のオランダ人たちの江戸参府をいちばんたのしみにしていたのは、幕府の天文方（司天監ともいった。『司天』は天文をつかさどる意）のひとつとと奥医師らであった。これらの日本人は、学術上の質問を準備し、オランダ人が江戸にいるあいだにふつう三回面会をもとめた。そんな折、西洋演劇のことが話題になることもあったであろう。オランダ人は江戸にむかうとき、芝居をみることもあった。

たとえば、出島の医官シーボルトは、大坂で歌舞伎「妹背山」^{（9）}を観劇しているし、商館長のメイランも在任中芝居見物をしている（時期と場所是不明）。メイランの『日本』^{（ヤパン）}（一八三〇年刊）には、日本の芝居の特徴についてふれたものがあり、その中でシェイクスピアのことを例に引いている。いわく――

彼ら（日本人）の演劇作品は、シェイクスピアの作品と同じく悲劇、喜劇をいっしょに演ずる、というよりはむしろ悲劇と喜劇をむちゃくちゃにまぜ合わせているのである。

注・庄司三男訳『日本』雄松堂出版、平成14・1、一八二頁。

竹村の説は、断定と想像をまぜた点に特徴がある。が、『ロメオとジュリエット』がかりに長崎で上演されたとする推断が正しいものであるとしても、鶴屋南北の耳に入った情報は、「墓地で女が蘇生する芝居がある」という程度のものであったろう。^{（10）}という。

いったん死んだ人間が、墓場で生き返るといったアイディアは、きわめてユニークな共通的なものである。が、東西の芝居のなかで、因果関係がはっきりせずして起っているだけに、千古の謎といえる。

出島のオランダ人は、どんな本をもち、よんでいたのか。そして書庫にはどんなものがあったのか。これらの点に関して筆者は寡聞にしてよく知らぬ。が、かれらの蔵本のなかに、『ロメオとジュリエット』の蘭訳や仏訳^{（11）}があったかも知れない。

一 模倣文学か暗合か

モーパッサンの「帰郷」――テニソンの「イノック・アーデン」の模倣か。



モーパッサン

消息が絶え、死んだとおもわれた人間が、あとで生きて還って来たという話はたくさんあるようだ。たとえば——出征して帰還せず、戦死したとおもわれた人間や漁に出て海難にあい、亡くなったと思っていたら、ある日ひょっこり帰ってくる。中には孤児（こけい）を守ることができずに再婚した妻が、先夫が還ってきたために困惑する話さえある。そういう話が文学の題材になり、いろいろな佳品（かひん）が生まれた。

永井荷風（一八七九〜一八五九、明治から昭和期の小説家）は、

——さういふ話を聞いた時、わたしは直にモーパッサンの「還る人」Le Retour と題せられた短篇小説を思起した。テニソンが長篇の詩イノック、アーデンも亦同じやうな題材を取ってゐたやうに記憶してゐる。然しそれ等は いづれも行衛不明（ゆゑふめい）になつてゐた漁夫（いづはそ）が 幾星霜（いくせいそう）（年月）を経た後 郷里へ還つて来た話で、戦争の事ではない（噂（うわさ）ばなし）。

荷風がモーパッサンの「還る人」Le Retour（筆者は便宜上、「帰郷」とよぶことにする）という短篇をよんだのは、アメリカ滞在中のことのようだ。

明治三十八年（一九〇五）八月三日に、モーパッサンの『水の上』をよんでいる（『西遊日誌抄』）。
その後の荷風のモーパッサン遍歴をしるすと、つぎのようになる。

明治39年（一九〇六） 6・21……『メゾン テリエ』

” 7・16……『ベラミ』
” 9・17……『イヴェット』（「帰郷」をふくむ）
” 10・3……『ロンドリ姉妹』

いまから筆者が講究したいのは、モーパッサンがアルフレッド・テニソン（一八〇九〜九二、イギリス詩人）の物語詩「イノック・アーデン」（一八六四年）をよんで何らかの感化をうけた結果——文筆活動に変化をおこし、それを意識的にじぶんの作品に移したこと——じっさい存在したであろう因果関係——影響のあとをさぐることである。



アルフレッド・テニソン



テニソンの生れた家（“聖マーガレット教会”）
〔サマースビー村〕

発動者テニソンとはどのような人であったのか。また「イーノック・アーデン」とは、どのような作品なのか。まず作者の略伝と物語のあらましについて述べておこう。

アルフレッド・テニソンは、一八〇八年八月六日——イギリスのリンカンシア（イングランド中部の北海にのぞむ州）のサマースビー（リンカンの東約四〇キロ）という戸数十五ほどの小さな村に生まれた。父は村の牧師であった。牧師館（聖マーガレット教会）は、牧草地の斜面にあり、ニレやポプラの樹から成る小さな森にかこまれていた。数十キロもいけば北海をのぞむことができた。アルフレッドは七歳になると、ラウス・グラマー・スクールに通った。

一八二八年、かれは兄のチャールズとともにケンブリッジ大学のトリニティ・カレッジに入学した。このころから詩作において頭角をあらわし、メダルを獲得した。大学卒業後、つぎつぎと詩集を刊行し、一八五〇年桂冠詩人（国王が任命した王室付の詩人）となり、ヴィクトリア朝の代表的詩人としての地位を確保した。その詩の特徴は、美しいリズムと叙情性にあった。

「イーノック・アーデン」は、一八六四年（元治元年）に発表した小物語詩である。ワイト島（英仏海峡にある）の西の端——フレッシュウォーターの入江を見おろすメイドンズ・クロフトと呼ばれる牧草地の小さな小屋（あずまや）のなかで、二週間ほどで書きあげた。前ラファエル派の彫刻家兼詩人トマス・ウルナーから聞いたじっさいの話をもとに、詩作したものらしい。サフォーク（イングランド東部の北海にのぞむ州）の漁夫の実話がもとになっている。

テニソンがこの作品を発表してから、似たような話がいくつか、かれのもとに送られてきたとい

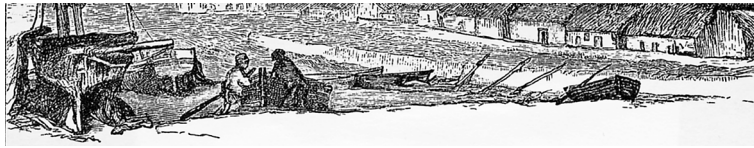
「イーノック・アーデン」は、船のりの悲哀をうたった哀詩である。登場人物は——

アニー・リー……………港でいちばんきれいな娘。

う。⁽¹⁵⁾



イノック、アニー、フィリップら、三人の子どもたち。
Enoch Arden, Tincknor and Fields, Boston, 1865 より。



「イノック・アーデン」の舞台になっているイギリスの港町の図。

フィリップ・レー……………粉屋のひとり息子。
イノック・アーデン……………孤児。父は水夫であったが、難船して亡くなる。
ミリアム・レーン……………港の酒場兼水夫宿の経営者。イノックのさいごを看とった人。

舞台は、イギリスのさびれた港町。そこには波止場——赤い屋根の家——くずれかけた教会——デーン人の墓などがある。この三人は、子どものころ、港にちかい海岸の断崖にある洞穴のなかでよくまゝごとをして遊んだ。フィリップ、イノックらの少年は、かわるがわる主人になり、アニーはかれらの妻になった。この夫婦ごっこは、のちに現実のものとなる。フィリップは内気であり、はっきりじぶんの感情を人に伝えられず、だまってアニーを愛していた。一方、イノックはじぶんの愛を相手にはっきり伝えるようなタイプの少年であった。そしていっぱい金をため、じぶんの舟をもち、将来アニーと世帯をもつのが夢であった。

やがて二人の少年は青年に、少女は娘に成長した。秋の夕ぐれ、フィリップは丘にのぼったとき、イノックとアニーのしたしそうな光景を見、そこにじぶんの哀しい運命を読みとった。かれは心をいため、森のしげみの中に姿をけした。……

イノックとアニーは結婚し、七年のしあわせな時が流れた。さいしょに女の子が、ついで男の子が生まれた。この間イノックは商船の乗組員や猟師として働いた。かねて子どもたちにはよい教育をさずけたいと思っていた。漁をしての生活は榮えた。しかし、有為転変はひとの世のつね。あるときこの小さな港から北へ十マイルほど行ったところにある港で、碇泊中の船のマストからすべり落ち、片足を折ってしまい、ながい間床についた。

そんな折、アニーは病弱な男の子を生んだ。イノックが養生している間に、同業者がかれの商売にこっそり割り込んできた。一家がドン底生活を送っていたとき、救いの神がおとずれた。以前、かれを使っていたことがある船長が、かれの不運を聞き、家にやってきた。船長は中国へむかう船の水夫長をさがしているが、それをやらぬかといった。イノックは、急場をしのぐために、船長の申し出にすぐに応じた。

アニーは、イノックがマストから落ちて負傷したことや病弱な子どもがいること、またふたたび夫の身に何か変事が起るのではないかと思うと、心配でならなかった。だから夫が船に乗ることに反対した。イノックはすべて家庭の事を思っている旅立ちだといい、妻の願いをききながした。

じぶんの留守中、家族が食べてゆけるように、永年の友であった小舟を売り、その金でもって、通りに面した家を改築した。小さな居間を店舗のようにし、そこにさまざまな品物をならべて、売らせることにした。

出発の日、イノックは妻を抱きしめ、子供らをつぎつぎにキスをして別れをつげた。アニーは商売をはじめたものの、しろうとゆえにうまくゆかなかった。病弱の子どもはだんだん病み細り、とうとう亡くなった。

フィリップはイノックの家の暮らしぶりや不幸について知っていた。が、イノックが旅立ってから、一度もその家を訪ねたことはなかった。しかし、ある日、思いきって訪ねると、アニーは憂いに沈み、声を立てずに泣いていた。

フィリップは、イノックが望んでいたことを話すために来たといい、子どもたちを学校にやらせて欲しいといった。アニーはその申し出に感激し、かれの手をかたくにぎった。やがてイノックの子どもたちは、学校に行くようになり、必要なものはすべて買いあたらえられた。またフィリップは、子どもたちを口実に、野菜・果物・小麦粉やうしろの丘でとらえたウサギなどをアニーの家に届けた。

やがて子どもたちもフィリップになじみ、「フィリップ父さん」とよぶまでになっていた。一方、イノックはどうなったのか。かれは故郷をはなれてから音信不通であった。ただの一度も便りがなかった。すでに十年もの歳月がたっていた。……

ある日の夕方のこと——アニーの子どもたちは、ほかの友だちといっしょに木の実ひろいに行きたがった。アニーも子どもらといっしょに行きたいと思った。子どもたちはもう一人——フィリップお父さんを誘うことを忘れてはいなかった。フィリップは、粉ひき場でまっ白になって働いていた。かくしてみな山野に出てあそびたのしんだ。子どもたちは丘をのぼったり、くだったり、浮かれさわいだ。

アニーは息がきれて、丘を登れなくなり、「休ませて」といった。するとフィリップもいっしょに休んだ。かれににがい想い出がよみがえってきた。そのむかし、この森のこのところで、イノックとアニーが恋をかたっているのを目撃し、手負いのけもののように茂みの中に身をかくした

ことを思いました。

子どもたちは、森のなかの窪地ではしゃぎまわっていた。アニーはといえば、両手のなかに顔をうめていた。フィリップは、彼女のふさぎこんでいるのを見て、怒気^{どき}をふくんだような声で、

——船は沈んだのだ。もう考えないほうがよい。
といった。

するとアニーは、

——わたしは船のことを思ったではありません。子どもたちの声を聞くと、淋しい気分になるのです。
と答えた。

フィリップは彼女の近くになじり寄ると、胸中を明かした。あなたが貧しく、人の力にたよらねば生きてゆけないのを見るのはつらい。思う存分にお世話するために、また子どものしあわせのために、妻となってくれませんか、と。

アニーはこの求愛にたいして、

——ひとは恋を二度することができでしょうか。イノックを愛したように、あなたを愛せましょうか。
と、いった。フィリップは答えた。

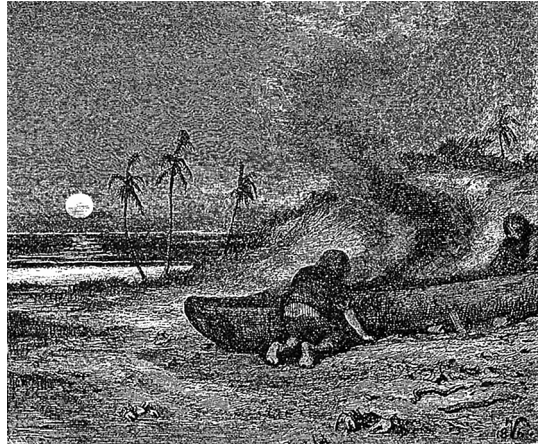
——わたしはイノックほど愛されなくてもよいのです。

アニーはこのことばに心がうごかされ、返事を一年まって欲しい、といった。

その年の秋は、あつという間にすぎ、また新しい秋がおとずれたとき、フィリップは約束の履行をせまると、アニーはもう一カ月待ってほしいといった。フィリップはせつつくことなく、決心がつくまで待ちましようといった。かくしてまた半年の歳月が過ぎていった。

二人のことは港の口さがない連中のうわさになっていた。二人はいっしょになるのか、ならないのか。推量や邪推が飛びかった。ある晩、アニーはよく眠ることができず、神にわがイノックはもう死んでいるのか、そのことのお告げを求めた。ベッドからはね起ると、灯火をつけ、聖書をひつつかみ、とっさにそれを開き、お告げを知ろうと、指をあてた。

すると、指は「ナツメヤシの樹のもとに」という文句をさし示していた。それは彼女にとって何の意味のないものであった。彼女はしかたなく、



イノックら漂流者が、舟をつくる図。

聖書をとじて眠りについた。

その夜、彼女が夢のなかで見たものは、つぎのような光景であった。——夫は丘のうえ、ヤシの木の下にすわっていた。太陽はそのうえでさんと輝いていた。夫は天国で、神を賛美する声（ホザナ）を唱へ、しあわせに暮らしているように思えた。ナツメヤシはエルサレムの人たちが、その小枝をキリストの前に散らし、むかえた樹だ。夫はもう亡くなったのだ。……

アニーは、そう思うと、ついに結婚に同意することにし、フィリップを呼びにやった。そして、気ぜわしく、

——もうわたしたちは結婚しても、何の差しつかえありません。

といった。

かくして兩人は結婚した。イノックが消息を絶って十二年目のことであった。ところでイノックはどうなったのであろうか。じつはかれは生きていたのである。

かれが乗った“幸運”号は、イギリスを出帆したのち、ビスケー湾を南下し、希望峰をへて東インド諸島に達し、やがて目的地の中国の港に碇をおろした。この間船は、しげやなぎを交互に経験した。往きの航海はよかったが、帰りは運がわるかった。はじめはおだやかな海原を進んでいたが、やがて気まぐれな、変りやすい風と遭遇し、かわるがわるむかい風と暴風に襲われた。そして月のない暗い夜、船が吹き流されていたとき、突然ドシンと暗礁にぶちあたり、船はみるみるうちに沈んでしまった。

生き残ったのは、イノックと他の二人の仲間だけであった。三人は浮いて流れる船具、折れたマストのようなものにすがって漂流をはじめ、明け方にある一つの島に打ちあげられた。その島は豊かな島ではあったが、絶海の孤島であった。

その島は、人間が生きてゆくための食物に何の不足もなかった。やわらかい果物、ヤシの実、大きなクルミ、滋養に富んだ木の根、鳥やけものもいた。かれらは海にむかって開いた谷間の洞窟を住居とした。三人のなかでいちばん若かった者が、難波したときのけががもとで五年間臥せていたが、亡くなった。あるとき、イノックとつれの男は、一本の倒木をみつけた。その者は、木の幹の中味を焼いて舟をつくろうとして、暑氣にあたり死んでしまった。



イノックが水をさがしにきた水夫らと出会う図。

熱帯の孤島のくらしは、くる日もくる日も単調なものである。眼に入るものは、みなれた空と海、自然の景色である。聞えるものは、潮騒、木々のざわめき、海鳥のさけび声、海にそそぐ小川の水の音。イノックは、すわったときも浜辺をあるくときも、帆影をもとめて海をみつめた。またあるときは、幻覚がおこり、故郷のことを追想した。

しかし、かれの不幸は、いつまでもつづかなかった。幸運丸とおなじように針路からはずれ、吹き流されたオンボロ船が、水をもとめて、その島のちかくに錨をおろした。明け方のこと、航海士は山のほうから流れおちる水を見て、水夫の一隊を島に送った。

そのとき水夫らは、長い髪をし、ひげもじやの日焼けした妙なかつこうの者をみた。イノックである。かれはわけのわからぬことをぶつぶついていた。けれど案内役となって水夫らをきれいな水が流れている所へ連れていった。水夫たちは、水をたるに詰めると、イノックを本船に連れ帰った。

船のなかでかれは、よくまわらぬ舌で身の上をかたった。はじめだれもがその話を信じようとしなかった。が、聞いているうちに、心をうごかされた。イノックは服をあたえられ、故国まで無賃で送られることになった。

やがてかれを乗せた船が、むかし出帆した港についたとき、水夫らはイノックをあわれみ、金をあつめ、それをかれにあたえ、上陸させた。

陸にあがると、イノックはわが家をさして歩きはじめた。海のもやが、あたりを灰色にうずめていた。こぬか雨がふりだし、ますますあたりが

暗くなった。行く手の左右に、うら枯れた木立、畑、牧場などがみられた。やがてわが家に着いたが、灯火はみえず、人声もなかった。霧雨のなかで見えたものは、

「売家」

の文字であった。かれはアニーが

(死んだのか……)

と思った。

かれは波止場のほうまで下りていき、なじみの酒場(安宿をかねている)をさがした。それは崩れかかったような居酒屋であり、主人を亡くした未亡人のミリアム・レーンが細々と店をやっていた。イノックは、しばらくこの酒場でつかれた体をやすめた。



イノックが故郷をさして歩く図。

ミリアム婆さんは、さすらいの旅人がイノックだとは気づかないから、その後のアニー家のことをたずねると、すっかり話してくれた。かれはかつてのおもかげはなく、顔は日に焼け、腰はまがり、おとろえてみえた。

赤ん坊が死んだこと。一家の生活苦。フィリップが彼女の子もたちを学校に入れたこと。彼女がフィリップの求愛をすぐ受け入れなかったこと。それから結婚してフィリップの子どもを生んだこと。そしてさいごに、イノックが難波して、行方不明になったことなどを語った。

十一月のどんよりした夕方のこと——イノックは、港のうしろにある小高い丘に足をはこんだ。かれはそこにすわってしばらく眼下のただずまいを見たのち、フィリップの家をめざした。その家は通りに面しており、陸のほうにむいたさいごの家であった。

囲いをめぐらした四角の庭があり、裏手には荒地に通じる小門があった。庭にはイチイ（墓地などにみられる常緑樹）が茂り、砂利の小道があった。かれはイチイの樹の背後から、そっと屋内をのぞいた。赤々と燃えている暖炉。テーブルのうえには、茶わんや銀器がならんでいた。炉の右手にフィリップがいて、じぶんの子どもを抱いていた。義理の父のうしろには、赤ん坊をあやす母親そっくりの娘がいた。炉の左手には、アニーがときどき赤ん坊のほうに目をやりながら、いまや大きく成長した息子とときどき話をしていた。

イノックは、フィリップ一家のしあわせな家庭風景をみて、それを破壊してはならぬと思い、こそこそその場を去った。その後かれはじぶんの力で生きてゆこうと決心し、せっせと働きだした。かれはどんな仕事でもできた。おけ屋、大工、魚網あみのしごと、帆船の荷物のつみ下ろしの手伝いなど。

ところが、故郷に帰って一年ほど経ったころ、体の調子が悪くなり、しだいに衰弱してしごとができなくなった。ついにはベッドに臥すようになり、もう余命いくばくもないことを知った。

かれはミリアム婆さんと呼ぶと、秘密をもらさぬことを誓わせ、じぶんがイノックであると告白し、死後のことをたのんだ。遺言をして三日目

の夜のことである。ミリアム婆さんが、かれの看護をしながら、うとうとしていたら大きな海鳴り（遠雷のような、低いうねり音）がし、港の家々は震動した。イノック目をさまし、起きあがると、――

「船だ、船だ、おれは救われた!」

と声高にさげぶと、あおむけに倒れ、こときれた。

イノックは、白帆の救助船の来航を夢みつつ、亡くなったのである。かれの葬儀は、この小さな港にめったにないほどの立派なものであった。

つつましく暮らす漁夫の喜怒哀楽をえがいた「イノック・アーデン」は、世界中でよくよまれた物語詩である。それが出版された当初、イギリスでまたたく間に六千部売れ、かれは以後しばしば「民衆詩人」とよばれた。⁽¹⁶⁾ この作品は、各国語に訳され、

独訳 九

仏訳 八

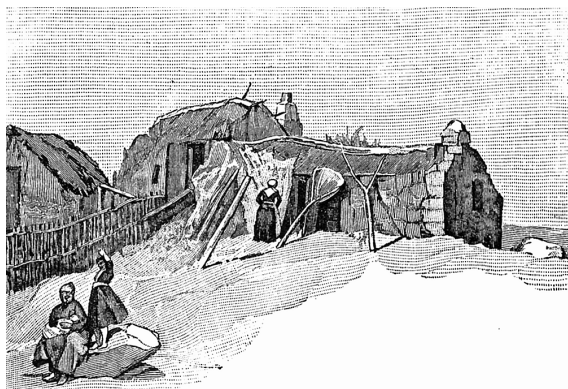
があるほか、イタリヤ・オランダ・スペイン・デンマーク・ハンガリー・バイエルン・日本でも翻訳が刊行された。

テニソンは港や水夫を愛した。かれは船乗りの心持ち、ことにイギリス人の豪勇が好きであった。⁽¹⁷⁾ 海をこよなく愛する気持は、「イノック・アーデン」に如実に現われているのだが、かれは古代スカンディナヴィア人の血が体内に流れているのではないかと思っていた。

テニソン一家は、「イノック・アーデン」が刊行される直前にブルターニュ（フランス北西端の旧地名）をおとずれたが、そのとき「イノック・アーデン」に似た話や民話を発見したようである。ブルターニュ人の水夫は素朴であり、信心深く、多くはアイスランド近海まで魚をとりに行っていた。⁽¹⁸⁾

海を描いた作家は多いが、モーパーッサンには地中海のあたたかい海とノルマンディー地方の荒海を描いた小品がある。後者の作品に、ニューファウンドランド（カナダ東部の島）のちかくまでタラ漁に出かけ行方不明になった男が、十年ほどたって帰ってくる話（「帰郷」^{ルルトワール}）がある。

「帰郷」は、わずか十ページそこそこの小品だが、なかなかの傑作である。この作品は、一八八四年（明治14）七月二十八日に『ゴロワ』紙に発表され、のち『イヴェット』に収録された。この作品の題材は、「イノック・アーデン」とおなじように、船にのって出かけた船乗りが難波し、十年ほど経って故郷に帰って見たら、女房はすでにちがう男といっしょになっていたという話である。



Cortazzo 画, G. Lemoine の影版による“帰郷”のさし絵。
Guy de Maupassant: *Yvette*, Albin Michel, 1949 より。

この物語のあらすじは、つぎのようなものである。まず登場人物についてのべておこう。

レヴェスク (亭主)	漁師
マルタンの上さん (女房)	レヴェスクと再婚した。
長女 十四歳	先夫の子。
次女 十三歳	
男の子 十四、五歳	レヴェスクの連れ子。
赤ん坊二人 二、三歳	レヴェスクとマルタンの間にできた子ども。
注・子どもたちの名前は不明。	
子どもたちの年齢は、先夫マルタンが故郷に帰ってきたときのもの。	
浮浪者………じつは前の亭主。名はマルタン。	

舞台は、フランス北西部——ノルマンデーの小さな村。そこにある漁師の家。その家は草ぶきの、粘土の壁でかこまれた小さな家であった。マルタン・レヴェスクの家とよばれていた。道ばたにあり、生け垣にかこまれた小さな庭がついていた。その庭でタマネギ、キャベツ、パセリ、香味野菜などを栽培していた。

亭主は漁に出ていて留守。女房は家のまえで大きな綱の目をかがっていた。長女は庭の入口でイスにすわり、下着をつくろっていた。次女は赤ん坊を抱きながら、あやしている。そのそばで、ちっちゃな子どもが二人、土いじりをしている。

そのとき、朝から家のまわりをうろうろしている浮浪者がまたやってきて、こんどは戸口のまんまに腰をおろした。そのため家の者はみな不安になった。一家の主のレヴェスクは、日暮れにしないと、海から帰ってこなかったからである。その妻ははじめマルタンという船乗りと結婚した。その二年後、夫はディエップの「姉妹」号という三本マストの帆船にのって出帆したきり、消息を絶った。……

彼女は夫とのあいだに女の子がひとりあり、さらに六カ月の身重であった。二人の子どもを苦勞し育てながら、夫の帰りを十年ものあいだ待っ

た。かいがいしく働くすがたや人柄のよさに目をとめた土地の漁師レヴェスクは、彼女に求婚した。レヴェスクは男やもめであり、男の子がひとりいた。やがてお互い連れ子のあるマルタンとレヴェスクはいっしょになった。

三年のあいだに、二人のこどもができた。五人の子どもをかかえての暮らしは、らくではなかった。パンは高いし、肉などはめったに口に入らなかった。冬場、海がしけると漁に出れないから、生活はいっそう困窮し、パン屋に借金することがよくあった。

先ほどの浮浪者は、くいのように動こうとせず、じっと一家の家のほうをみていた。かみさんのマルタンは、蛮勇をふるい、シャベルをつかむと表に出た。

——あんたは、そこで何をしてるんだ。

——おれは涼^{すず}んでいるだけだ！ それのどこがわるい。

——家のまえで、なんでスパイのようなまねをするんだ。

男は昼ごろ、いったん姿を消すと、夕方またやってきた。が、夜になるころ、その姿はなかった。

日が沈み、夜になってから亭主がもどって来たので、女房は昼間の出来ごとを話すと、夫はどこかの物好きか、いたずら者だろう、といって、意に介すことなく寝てしまった。

翌日は大風だったので海に出られず、レヴェスクは女房の綱のつくろいを手伝った。九時ごろ、パンを買いに外に出ていた長女が血相をかえて家にもどるなり、

——母ちゃん、またあの男がいるよ！

と、大声でいった。

母親はかんを起こし、まっさおな顔になると、夫に表に出て話をしてきておくれといった。

日やけた顔、濃い赤毛のひげ、青い目、がっしりとした体つきのレヴェスクは、その徘徊者のほうに近づいていった。ふたりの男は、話しはじめた。

母親と子どもたちは、家の中からそのようなすをじっと見ていたが、気が気でなかった。やがてふたりの男は、連だって家のほうにくると、屋内に入った。夫は



故郷に帰ったマルタンの図。

南南東七八一キロ。地中海に面した小港）から歩いてきたという。これからどこへ行くのかと聞くと、ここへ来た、のだという。知っている人がいるのか、とたずねると、

—— いるかも知れん。

といった。名は何ていうのか聞くと、顔をあげずに、

—— マルタンという。

と、だけ答えた。

その名を聞いて、母親は異様な戦慄に身をふるわせた。その男は死んだと思った元亭主であったからである。遭難のいきさつは、つぎのようなものであった。

乗った船がアフリカで座礁し、三人だけが助かった。が、土民につかまり、十二年間奴隷いとなった。しかし、通りがかったイギリスの旅行者に運よく助けてもらい、セートまで連れてきてもらったという。母親のマルタンは、エプロンに顔をうめて泣いていた。この突然の来訪者に、レヴェスクの一家は動転した。レヴェスクはどうしてよいかわからなかった。けっきょくあんたの望みのまゝにする、というしかなかった。マルタンはパンを食べおえていた。かれもどう結末をつけてよいかわからなかった。

レヴェスクは、村の司祭にきめてもらうことにした。マルタンが立ちあがると、女房はその胸に泣きふした。かれはふたりの子どものほっぺたにキスをした。それから、ふたりの男はいっしょに外に出た。「コメルス」というカフェの前まで来たとき、レヴェスクが

—— ちょっと一杯やりたいが……。

—— この人にパンをすこし、リンゴ酒を一杯さしあげな。おとといから飲まず、食わずだそうだ。

その男の顔はやつれ、しわだらけであった。その顔をみただけで、苦難の人生を送ってきたことがわかった。男はパンをゆっくり食べ、リンゴ酒を一口ずつのんだ。だれもがその視線をこの男に注いでいた。

レヴェスクが、どこから来たのか、とたずねると、セート（フランス南部——パリの

というと、マルタンも

——おれもやりたい。

といった。レヴェスクは、上等のブランデーを注文した。

そして店主に難波したマルタンが帰って来た、というと、太っちょのおやじは片手にコップを三つ、もう片方の手には酒びん（小型カラフ）をもって寄ってきた。

この話の結末はどうなったのか、だれにもわからない。われわれ読者が想像するしかない。

つぎに「イノック・アーデン」と「帰郷」の両作品にみられる近似点を一覧表にしてみよう。

「イノック・アーデン」 Enoch Arden

長い断崖がとぎれて裂け目をつくっている。その裂け目に、黄色の砂地がある。そこに波があわ立っている。⁽⁺⁾

孤児のイノックは幼なじみのアニーと結婚し、七年目に娘が、さらにその二年後に男の子が生まれた。

夫のイノックは、中国へむかう船に水夫長として乗りくみ、行くえ不明になる。

妻のアニーは、夫の帰りを十年まつた。⁽⁺⁾

「帰郷」 Le Retour

海はみじかい、単調な波で岸辺を打ちつけている。⁽⁺⁾

漁師の妻マルタンは、結婚して二年目に亭主が行くえ不明になる。女の子がひとりあり、おまけに六カ月の身重であった。

三本マストの帆船にのり、出漁するが行くえ不明になる。

妻マルタンは、夫の帰りを十年まつた。⁽⁺⁾

アニーは、幼なじみのフィリップの求愛をうけ、再婚した。彼女はフィリップの子どもを生んだ。^(三)

「先夫の身に何があったのか」

中国から帰帆するとき、船が座礁し、仲間ふたりと絶海の小島（アフリカ？）に漂着する。仲間は亡くなり、水をもとめてやって来た船に救出される。

イノックは故郷に帰り、フィリップ一家のしあわせそうな様子をのぞき見て、身をひく。その後、その家をそつとのぞくことはなかった。

「帰郷したときの容姿」

日やけた顔。こしはまがり、体はおとろえていた。^(四)
イノックは病気になる、下宿屋の酒場でひとり死んでゆく。

妻マルタンは、男の子がひとりいる男やもめの土地の漁師レヴェスクの求愛をうけ再婚した。結婚後、三年のあいだに子どもを二人もうけた。^(三)

「先夫の身に何があったのか」

アフリカ沖で座礁し、仲間ふたりと助かる。^(四)
しかし、土民につかまり十二年間奴隷となるが、イギリスの旅行者によって救出される。

妻子が住む家をそつとうかがった。

「帰郷したときの容姿」

しなび、しわだらけの顔をし、苦勞したようにみえた。^(五)
妻の再婚相手の家をおとずれ、みなに動揺と困惑をあたえる。

『イノック・アーデン』の原文は、つぎのさし絵入り本より引用した。

Enoch Arden by Alfred Tennyson, D. C. L., Poet-Laureate, Ticknor and Fields, Boston, 1865

(1) Id., p.3 And in the chasm are foam and yellow
sands;

(2) Id., p.27 That he who left you ten long years ago
Should still be living;

(三) Id., p.34 but When her child was born,

and the loss of all

(四) Id., p.36

But Enoch and two others.

(五) Id., p.45 Enoch was so brown, so bow'd so broken——

「帰郷」の原文は、つぎのさし絵入り本から引用した。

Guy de Maupassant: *Yvette*, Illustration de Cortazzo, Éditions Albin Michel, Paris, 1949

(一) Id., p.183 *La mer fouette la côte……*

(二) Id., p.186 La Martin attendit son homme pendant dix ans,

(三) “ et eut encore de lui deux enfants en trois ans.

(四) Id., p.192 J'nous sommes ensauvés à trois, Picard, Vatinel et mé.

(五) Id., p.190 Il avait un visage usé, ridé, creux partout, et semblait avoir beaucoup souffert.

両者の作品の舞台はどこか、どうもはっきりしない。「イノック・アーデン」のばあいは、北海か英仏海峡に面した小さな港を念頭においたものだろう。「帰郷」のばあいは、ノルマンディーの一漁村をイメージして描いたものと思われる。

イノックは商船に乗って故国をあとに中国へむかうのだが、マルタンは漁船にのり、ニューファウンドランド（カナダ東端の島）沖の「タラ漁」^{モリユ}に出かける設定になっている。モーパッサンは、何も語っていないが、その漁船はグランドバンクス（ニューファウンドランド島の南島にのびている浅瀬——二五メートル〜一〇〇メートル）にむかったものであろう。そこは寒流と暖流がぶつかるところ、ホタテ貝・ロブスター・タラなどの世界有数の漁場なのである。

当時は伝統的な「はえなわ」（中心となる一本の糸に多数の釣糸をつけ、その先に釣針とエサをつけて魚を釣る）でタラを獲っていたが、近年



エトルタに残るモーパッサンの別荘“ギエット荘”。
Albert Lumbroso の Souvenirs sur Maupassant, 1905 より。

大型トロール船による乱獲により、激減しているらしい。

モーパッサンが「放浪生活」^{ラウイ・エラント}のなかで、フランス北部の灰色のつめたい海のそば——

小さな漁港で育った、といっているのはどこであろうか。おそらくそこは幼少年時代をすごしたエトルタ（ノルマンディー地方の保養地）のことであろう。かれの母は、エトルタに別荘をもっていたから、夏になるといつもそこで休暇をすごした。また後年、その文名がががり有名になってから、別荘をつくり、「ギエット荘」と名づけた。とねりこ
とポプラの樹にかこまれたこの二階建の別荘は、現存し、いまはべつな家族の持物とな
っている。先年、筆者はその家のちかくまで行ったことがある。

エトルタの海のふちの崖のうへは、いつも強い風がふいている。この海岸保養地は、
風と雨、波しぶき、魚や綱のほいに満ちていた。モーパッサンは、十三歳まで母親の
膝下^{しっか}にあり、ノルマンディーの風土と母親がさいしょの教師であった⁽¹⁹⁾。幼いころ土地の司
祭からラテン語の基礎と算数をまなんだが、外国語にはうとかったらしい。しかし、ノ
ルマンデーの方言^{バトワ}が話せたから、漁師や百姓としたしみ、
幼いモーパッサンは、天気がよいとき、したしい漁師の舟にのるとよく海に出た。またフェカン（英仏海峡にのぞむフランス北部の漁港。パリ
の西北西二〇八キロ）の水先船にものせてもらうこともあった⁽²¹⁾。

はじめて文学的感動をおぼえたのは、十三歳のころのことであり、家にあったシェイクスピアの仏訳『マクベス』や『真夏の夜の夢』をよんだ
ときであった⁽²²⁾。

テニソンの「イノック・アーデン」（一八六四）とモーパッサンの「帰郷」（一八八四・七）に共通してみられる部分的な字句の類似性から、両
者のあいだに何らかの脈絡があると仮定することは容易であるが、モーパッサンの借用の証明はひじょうにむずかしいといわねばならない。

ルイ・フォレストイエが付けた「帰郷」の注釈（ガリマール版『モーパッサン——短篇と中篇』一九七九年刊・一三七九頁）によると、モーパ
ッサンは、船乗りが故郷へ帰る通俗的なテーマを利用していることが顕著であるという⁽²³⁾。

モーパッサンはブルターニュ地方につたわる言い伝えやフランスの民謡シャンソン・ポピュレールを思いだす一方で、物語の材源を他の文学作品にもとめたようである。行方知れずになった夫が帰って来たら、女房は別な男といっしょになっていたという話。それと似たような話がエミール・ゾラ（一八四〇～一九〇二、フランスの自然主義作家）の『ジャック・ダムール』という中篇である。この作品は、一八八〇年八月、『ヨーロッパ通報』にのり、フランスでは『フィガロ』紙が一八八三年四月から五月にかけて連載し、翌年四月『ナイス・ミ克蘭』に収録された（エミール・ゾラ作 朝比奈弘治訳）『水車小屋攻撃他七篇』岩波書店、平成27・10、『解説』とガリマール版の注を参照）。

ルイ・フォレストイエによると、この作品がはじめて発表になった一八八〇年八月、モーパッサンは同紙のことをよく知っており、また『ジャック・ダムール』が『ナイス・ミ克蘭』に収録されたのは——「帰郷」が発表になる数カ月まえの——一八八四年四月のことである。だからモーパッサンは、ゾラのこの作品を無視できなかったはずだという。

ところで『ジャック・ダムール』とは、どのような作品なのか。ジャック・ダムールという妻も子もある若い彫金師が、パリ・コミュニケーションに参加し、捕えられてニューカレドニアに流刑になる。ある日かれは仲間四人とその島から脱走する。かれはアメリカイギリス—ベルギーをへて二十年ほどしてフランスに帰ってくるのであるが、美人妻（フェリシー）は、サニヤールという六十歳台の肉屋と再婚し、子どもが二人いた。ジャック・ダムールには、フェリシーとの間に娘があり、いまや美人に成長し、金持ちの囲い者になっていたが、その別荘でくらすようになる。

「帰郷」が発表される一八八四年当時、モーパッサンが発表した『漁村物』は、ほかに「のんべえ」（イヴローニユ）（一八八四・八、漁師による女房殺しの話）があるくらいである。

おそらくモーパッサンは、ゾラの『ジャック・ダムール』という新聞の連載小説をよんだのがきっかけとなり、『帰郷』というテーマを思いついたように思える。もちろん物語を組み立てるまえに、その骨子（骨ぐみ）——登場人物——舞台を構成する情景——やまばなどを考えねばならない。話の大筋の出所は、雑誌（たとえば『ル・マガザン・ピトレスク』〔さし絵入りの文芸雑誌〕）に連載された「イノック・アーデン」の仏訳——筆者はどこかでそれを見たような記憶がある）や、「イノック・アーデン」の訳書であつたらうか。モーパッサンは、「帰郷」をかくに際して、「イノック・アーデン」を想起したはずである。

「帰郷」の生原稿を実見したロバート・J・ニースの論文「モーパッサンの二つの原稿——「帰郷」と「ル・シャンドリヴィエ」⁽²⁴⁾によると、「帰郷」

郷」を執筆するにあたってモーパッサンは、完全なスケッチ画があったとし、その筆ははじめから順調なスタートを切っている、とのべている。かれは形容詞・動詞・名詞などをよく直したが、それはふさわしいことばを求めたからである。「帰郷」には、大きな変更や修正はみられなかったという。ということは、この短篇は、ひといきに書かれたということであろう。

モーパッサンの「帰郷」は、隣国イタリアの著名な詩人・小説家ガブリエレ・ダヌンツィオ（一八六三～一九三八）の短篇「ペスカラの中篇小説」に影響をあたえているという。この作品は表現こそちがえ、内容の中心テーマは同じなのである。

トゥルレンダナは、三十年ちかく外国でくらしのち、ペスカラ（イタリア中東部——アドリア海にのぞむ町）に戻ってくる。かれは海で死んだものと思われていた。妻はその間に三度結婚していた。かれは先妻が営なむ小ホテルに投宿するのだが、そこで女房の四度目の亭主と会う。

ダヌンツィオは、主人公の人物を描写するにあたって、モーパッサンの「帰郷」から、その語句を意識的に借用したようである。酷似している字句は、つぎのようなものである。帰ってきた男の憔悴しいした風ぼうを描いたものに。

「帰郷」

Il avait un visage *usé, ridé*,
creux partout, et semblait avoir
beaucoup souffert.

Yvette, Albin Michel, 1949, p.190

「ペスカラの中篇小説」

La pelle, bruna, secca, *piena*
di asperità, corrosa dalle intem-
perie, riarsa dal sole, *incarnata*
dalle sofferenze, ……

Novelle della Pescara, San Panta
版, 刊行年不詳, p.484

再婚した亭主が、死んだはずの男が還ってきた、と酒場で、さげぶくんだり。

Levesque ayant pris une chaise lui
demanda:

—Alors vous v'nez de loin?

Id., p.190

「帰郷」

Alla fine, [Verdura] domandò:

—Da che paese venite?

…—Vengo di lontano.

Id., p.539

「ペスカラの中篇小説」

Levesque lui demanda brusquement:

—Comment que vous vous nommez?

……Je me nomme Martin.

Id., p.191

「帰郷」

…—Il vostro nome, signor forestiere?

—Io mi chiamo Turleadana.

Id., p.539

「ペスカラの中篇小説」

帰って男と新しい亭主とのやりとり。——「遠くから来なされたのか」。「名はなんというのか」、と尋ねる場面。

C'est Martin qu'est évenu, *Martin*,
celui à ma femme, tu sais ben, Martin
des 《Deux Sœurs》 qui était perdu.

Id., p.196

—Ecc'a qua Turlendana, Turlendana
marinaro, *lu marito de mógliema*,
Turlendana che sera morto!

Id., p.540

注・引用にあたって Maupassant et les plagats de G. D'annunzio という論文を参照した。

Albert Lombroso 編 *Souvenirs sur Maupassant*, Bocca Frères, Rome, 1905 所収。

ひとは戦争によって、その生活までも変革させられる。それは前世の悪業のむくいか、それとも宿命というものか。あるいは単なる悪運のせい
か。いずれにせよ、戦争は人の運命を翻弄したことはたしかである。

一九六一年（昭和36）製作のフランス映画に、「かくも長き不在」(*Une aussi longue absence*)と題する作品があり、筆者は少年のころ、それを
みた記憶がある。物語はパリ郊外——ピュート地区のカフェが舞台になっている。そのカフェをひとりで切りもりしているのが美人の女主人テレ
ーズ（三十八歳）である。亭主は出征したきり、行方不明である。ある日のこと、彼女はピュートのくずれかけた教会のそばを、肩からずだ袋を
さげ、手にカバンをもった浮浪者が通りかかるのをみかけ、注意をひかれる。その男はまだ帰還しない夫に似たところがあった。

あるとき、店に呼んでやり、食事をだしもてなしてやった。が、その男は脳に損傷があり、記憶をうしなっていた。そして二人は、あたかも恋
人同志が過去をなつかしむように、音楽にあわせてダンスをたのしんだ。やがてその男は表に出たとたん、パトロールカーの警笛をきくのだが、

突然両手をあげる。……

この映画は、運命にもてあそばれ、生きて還ってきた元兵士の悲哀をえがいているのだが、「イノック・アーデン」や「帰郷」と一脈通じるものがある。この稿をかきながら、ふとこの映画のことを想いだした。

日本の古典・近代文学にみる一つのテーマ——消えた夫の帰還と女房の再婚。

夫が還ってきたとき、妻は他の男と結婚していた、あるいは結婚寸前であったという話は、日本の古典にもその類例をみいだすことができる。古くは十一、十二世紀の平安時代に書かれたと推定される『伊勢物語』（歌物語。一二五の章段より成る。作者は不明）に、女が三年ももどらぬ夫に業を煮やし、別の男と結婚する直前といった話がある。「あずさ弓」と題する歌物語（和歌を中心として構成された短篇）がそれである。それはつぎのような話である。

むかし京のへんびな村里にある男がいた。男は宮仕えするといって女房と別れ、出かけたきり、三年も帰ってこなかった。女房は夫の帰りを待ちくたびれ、かねて言い寄っていた別な男に、「こよい逢いましょう」と約束した。ちょうどそんな折、亭主が帰ってきた。かれは「この戸をあけておくれ」といって、戸口をたたいたけれど、女はあけないで、そっと歌をさし出した。

あらたまの 年の三年を待ちわびて

ただこよいこそ 新枕すれ

（三年ものあいだ あなたの帰りを待ちました。が、待ちくたびれました。こよいはほかの男を迎える初夜なのです。）

すると男は、

あづさ弓 ま弓つき 弓年を経て

わがせしがごと　うるはしみせよ

（ながい歲月　わたしがそこを愛したように　新郎を愛しておくれ）

と、いって去ってゆこうとしたので、女は

あづさ弓ひけど　ひかねど　むかしより

心は君きみによりにしものを

（あなたのみ心はどうであったか知りませんが、わたしは、むかしからあなたに心を寄せていました。）

といったが、男は女のもとを去って行ってしまった。女は悲嘆にくれ、あとから男のあとを追ったが、追いつけず、泉のそばに倒れ伏した。女はそばの岩に、じぶんの指の血で、つぎのような歌を書きつけた。

あひ思はで　離かれぬる人をとどめかね

わが身は　いまぞ消えはてぬめる

（わたしの気持が通じず、去っていった人を引きとめることができず、わたしの命はいま消えようとしている。）

女は、こう血書けっしょすると息たえた。

つぎに引く例は、井原西鶴（一六四二〜九三、江戸前期の俳諧師・浮世草紙作家）の

「懷硯」ふところすすり（貞享Ⅱ一六八七年、説話）

「万の文反古」よろず ふみはうぐ（元禄九年Ⅱ一六九六年、書簡体の短篇）

注・“懷硯”とは、旅行用の硯の意である。

“万の文反古”とは、さまざまな古手紙の意である。

にみられる話である。

「懷硯」に収められている「案内あんないして昔の寝所ねどころ」は、つぎのような物語である。淡路島あわじしま（瀬戸内海最大のしま）の漁師に、北岸久六きたざしきゅうくくという者がいた。かれは毎年イワシ漁にやとわれ、東海とうかいの海へ出かせぎに出かけた。久六は読みかきがでぎず、長いあいだ使りもしなかった。その年の秋は、天気がわるく、風の便りに漁船がたくさん沈んだ、と聞いた家族や親類一同はたいそう心配した。

うわさうわさというものは無責任なものだから、久六のさいごをあたかも見てきたようにいう者もいる。中でも女房は、夫の身が気がでなく、毎日そのことばかり考えていた。

久六は養子であった。夫婦仲もよく、かれは両親にもよく仕えた。惜しい男を死なせたものと、ひとびとは同情した。一年ちかく経っても消息はなかった。だれもが久六が死んだものと思った。村を出ていった日を命日にし、いろいろ供養した。

女房はまだ若く、この浦うら（浜辺）では美人のほうであった。このまゝ後家を通させるのはかわいそうだ。再婚させるのがいちばんよいと、親類がいろいろさとしたが、彼女はなかなか承知しない。本人は剃髪して尼になることを考えていたが、皆からくどかれ、またもや養子を迎えることになった。

こんどの男は、おなじ浜の漁夫で、小磯こいその木工兵衛もくくべえという者であった。むことして不足がなかった。祝言しゅげんをあげた夜、女は久六のことをいつのまにか忘れて、寝所で新夫とむつみ、そのときの気分きぶんに身をまかせた。

家のものは前夜の婚礼でくたびれ、翌朝までぐっすりと寝込んでいた。

そこへ突然、久六が旅すがたで帰ってきた。勝手知ったわが家であったから、無断ではいった。久しく会わぬ女房が恋しく、うすぐらい寝所に
行ってみると、乱れたかっこうで寝ていた。いきなり添い寝したところ、女は目をさまし、夫をみてびっくりし、泣きだした。すると夜着の下か

ら木工兵衛が顔をだし、これも途方にくれた。

女はことのしだいを語り、一方久六も帰郷できなかった事情を話した。かれの乗った船は、暴風によって吹き流され、奥州の近海まで漂流したのである。久六と木工兵衛は、長年いがみあっていた。久六はまず女房を刺し殺すと、つぎに木工兵衛を討ち、かえす刀で自害した。それにしてもとんでもない不始末であり、不運というほかない。

「万の文反古」（四巻二）に収録されている作品に、「南部なんぶの人が見たも真実まこと」という話がある。

丹波たんば（京都市中部と兵庫県の一部をしめる旧国名）の下村しもむらという在ざい（いな）の利平という者が、すこしばかりの持参金をもって、京の河原町で両替屋をいとなむ孫八郎方に養子にきた。利平は孫八郎の娘こよしといっしょになって五、六年すぎたころ、京都での紙商売、茶屋への掛け売りの代金の回収がおもわしくないで、染木綿そふもゆんを仕込んで奥州地方へ商いに出かけた。

そのころ奥州では、五月雨さみだれ（五月ごろの長雨ながあめ）がふりつづいたので、留守宅では利平の難儀を思いやっていた。折から隣家の問屋に着いた南部商人は、最上川もががわ（福島県境の吾妻山に発し、山形県の酒田市で日本海にそそぐ。全長二三キロ）の洪水のはなしをした。

街道の渡し舟が波をかぶり、人馬や荷物のおおかたが遭難したと語ったので、しゅうとの孫八郎は利平のことが心配になり、ひょっとしてこんな着物を着た男がその舟に乗っておりませんでしたかと尋ねると、そういうかっこうの男はたしかに死にましたといった。その男は、四、五度高波に浮き沈みしたのち姿を消した、と下男と口をそろえていった。

それを聞いた孫八郎は、ひじょうに嘆き、男泣きになき、利平の女房のこよしもまた大いに悲嘆にくれた。そのありさまは、はたから見てもあわれであった。やがて百か日（死者の死後百日目の法事）もすぎると、こよしをこのままにしておくわけにもいくまい、と近所の人々が仲立ちとなって結婚のことをいいだした。するとおよしは再婚はいやだといった。しかし、みんなが寄ってたかって、養子を迎えないとこの家は立ちゆかないといい、無理やりこよしを承知させた。

新たに養子となったのは、利平の弟・利左衛門である。かれを丹波から呼びよせ、うむをいわせず祝言させてしまった。

ところが、婚礼をすませ、二、三日たったころ、利平がひょっこり帰ってきたために、一同あっけにとられてしまった。兄弟は面目めんぼをうしない、その夜いっしょにこっそりと家を出た。二人は高野山と熊野権現くんげんに参詣さんけいしたのち、山のなかで刺しちがえて死んだ。こよしも家出し、行方不明に

なった。

南部商人が利平らしき者の遭難をまことしやかに語ったために、三人までも不幸になった。ことに利平兄弟やこよしの運命は、ぜんしやう前生（世）からきまっていたものか。あわれな話である。

西鶴のこの二篇は、しあわせとわざわいが入れ替わった人生、運命になぶられた人間の悲哀をありのまゝに描いている。

つぎに取りあげるものは、「帰郷」の現代版である。夫の戦死が伝えられたあと、妻が再婚する話である。が、そこへ不意に夫がもどって来たために騒ぎがおきる。作家・永井荷風（一八七九～一九五九）と井伏鱒二（一八九八～一九九三）は、それぞれ似たような短篇をかいている。

永井荷風……「噂うわさばなし」（『勲章』扶桑書房刊、昭和21・10）

井伏鱒二……「復員者の噂」（『社会』鎌倉文庫、昭和23・6）

「噂うわさばなし」は、作者がある町にいたとき、ある人から聞いた話ということになっている。

兄弟とも理髪師である。兄は出征し、その遺骨が遺族のもとに送りとどけられたのち、両親や親せきの者が相談し、兄嫁を弟といっしょにさせた。終戦の年のくれ——ある日の夕方のことである。弟は夕飯をすませたのち、となり町に用たしに出かけた。女房のほうは銭湯に行こうとしたとき、背に荷物を負ひ、両手に包みをもった死んだはずの夫が突然よいやみの中に姿をみせた。

妻はびっくりすると同時に恐怖におそわれ、父親をよびながら、二、三軒先の仲人（なこうと小学校の先生）宅に身をかくした。両親も仲人も処置にこまり、嫁をひとまず実家に帰した。

その晩、両親と先生は、嫁のしまつについて相談した。兄は家を出て新しい生活をするから、嫁は弟のものにして、これまで通りの暮らしをせよ、といった。弟は兄が帰ってきた以上、兄嫁をうばうことはできないといった。けっきょく、結論はでなかった。

翌日、先生の細君が、嫁にどうするつもりか尋ねると、そのうちに東京に働きにいくつもりです、と答えた。やがて彼女は、東京にいる叔母をたよって家をあとにし、兄は闇屋をやっている戦友をたよって大阪にいき、弟は近所の娘で喫茶店ではたらいっているものと再婚した。

「復員者の噂」は、大字霞^{おおあさかすみ}ヶ森の水車屋のむこ・宙さん（四十男）の話である。終戦の三年まえに戦死の公報が家にとどいたので、水車屋にふさわしくないほどの大きな墓をつくった。宙さんの女房はトキノといい、若いときは美人であった。

彼女は夫の戦死公報を受けとってから、模範的な出征軍人未亡人といった評判をとった。それを耳にした新聞社から取材の申し込みがあった。しかし、記者がやってくる前日のこと、彼女はともあろうに隣村の九郎という戦傷者と駆けおちをした。かれは義足であるく人であったが、麦をひいてもらうために水車屋を訪ねるうちに、トキノと仲よくなった。

二人は駆け落ちし、一ヵ月後、近所の人たちを招いて結婚披露をした。ところが雨のふる晩のこと、夫婦が夕飯をたべていると、軍隊用の外とうを着た男が土間に入ってきた。その男は頭巾^{ずきん}（頭にかぶる袋形の布）をかぶっており、背中の荷物をおくと、水がめの水をひしゃくで飲んだ。そして、

——ああ、うまい。うちの水はうまい。

といった。トキノは、その声に聞き覚えがあった。宙さんの声だとすぐにわかった。

トキノは立ちあがったが、しりもちをついた。九郎はそっと立ちあがると、抜き足で土間におり、カサもささないで隣村の実家に帰ってしまった。

宙さんはだんまり屋になっていた。人と話をせず、出されるものをだまって食べ、茶もだまって飲んだ。トキノも近所の人たちも、かれが何を考えているのか、さっぱりわからなかった。九郎は隣村に帰ったきりになった。……

これら二つの小品も、戦争がもたらした悲惨な取返しのないできごとを描いたものである。

明治期の「帰郷」（モーパッサン作）の訳業。

わが国にいつごろモーパッサンの「帰郷」が紹介されたのであろうか。この作品の紙上紹介は、明治三十年代から同四十年代のことのようだ。歌人・詩人として令名のたかい与謝野寛^{よさのひろし}（一八七三～一九三五）は、平野万里^{ひらの ばんり}（一八八五～一九四七、明治から昭和期の歌人、東京帝大工学部出身。与謝野寛に師事した）といっしよに「帰郷」（「怪しい男」）を訳している。

近藤 秋果^{しゅんか}もまた訳筆をとっている。

怪しい男

モーパッサン作
与謝野鉄幹共訳
平野万里

注・『文の友』第17号所収、大倉書店。

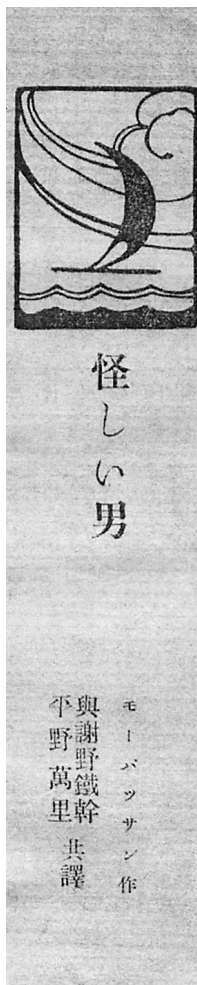
帰宅

秋果

注・『雄弁』第2巻第12号所収、明治44・12。同誌の目次には、「小説 帰宅（モーパッサン）……秋果」とある。

これらの二作は、原文のフランス語から訳したものか、それとも英訳から重訳したものか、何ともいえない。「怪しい男」は、原題の「*Retour*（「帰郷」）を改題したものである。

「怪しい男」は、全文総ルビ付である。どのように訳されているか、一節だけを引いて、訳しぶりをみてみよう。



海^{うみ}が短^{たん}かい、単^{たん}調^{てう}な波^{なみ}で磯^{いそ}を擦^{すり}耗^へらす。小^{ちひ}さい白^{しろ}い雲^{くも}が強^{つよ}い風^{かぜ}に鳥^{とり}が逐^おひ捲^まくられる様^{よう}に、広^{かう}漠^{もく}たる青^{あお}い空^{そら}を横^{よこ}に急^{いそ}いで通^{とほ}る、村^{むら}は日^ひに曝^{さら}され、洋^{うみ}

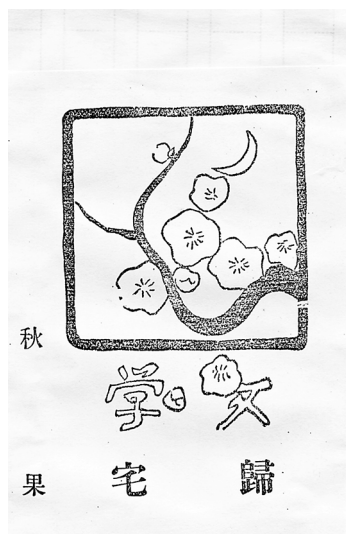
の方^{はう}にだら／＼と坂^{さか}になつて合^あの皺^{しわ}の中^{なか}に巢^すを食^くつて居^ゐる。
一つ離^{はな}れて、村^{むら}の入口^{いりぐち}の路^{みち}傍^{はた}に、マルタン——レヴェスクの家^{いえ}が立^たつてゐる。漁^{れう}夫^しの小^こ屋^やである。粘^{ねん}土^どの壁^{いへ}、茅^{かや}茸^{ぶき}の屋^や根^ね、その上^{うへ}を青^{あお}い一^{いち}八^{はつ}の叢^{くさむす}が飾^{かざ}つ

てる。ほんの少し玉葱、キャベツ、早芥菜、みつばなどが前栽に植つて居る、それが戸の前に四角いものを作る、生垣はそれと往来との間をしきつて居る。

原文と訳文をつきくらべ、訳業を大観したとき、部分的な難点（欠点）があるにせよ、よむにたえうる訳である。

しかし、こんにちからすると、古くさい訳語が用いられ、固有名詞の表記などが気になる。たとえば――

一八の叢……………	▼あやめが一面生えている
早芥菜……………	▼パセリ
みつば……………	▼チャービル（葉を香草に用いる）
前栽……………	▼庭さき
ドエー・ソエル……………	▼ドゥリスール号（主人公が乗った漁船の名）
謀者……………	▼スパイ
前垂……………	▼エプロン
和尚……………	▼司祭
カフェー・デュ・コンメルス……………	▼カフェ・デュ・コムルス（村のカフェの名）



海はこまかい単調な波を磯に打ちつけてゐる。小さい白い雲切は、強い風に逐はれた小鳥のやうに、広い青い空を足早に通つて行く。村は、日光に負喧（ひなたぼっこ）をしながら、太平に雪崩さがりになつてゐる谷間の褶（ひだ）に密集してゐる。

村の入口の、道路の傍には、ポツネンとして、マルタン レブスクの家が立つてゐる。泥で塗つた壁に、芽で葺いた屋根を鳶尾属（アヤメ科）の総（うす青色）で飾つた漁師の家である。僅ばかりの洋葱とキャベツと和蘭芹とチャアビルが小さいハンケチ程の野菜圃に、芽を出してゐる、圃は戸口の前に方形を作つて、垣根がそれと道路との間を隔て、居る。

秋果訳も不完全なものである。が、こんにちよむに耐えうるものである。しかし、ところどころにむずかしい語や古語が使われ、また固有名詞のよみに誤まりがみられる。それらはこんにち訂正を要するものであろう。

マルタン レブスク……………▼マルタン・レヴェ・エスク
 麴めんぼう砲……………▼パン
 サイダア……………▼シードル(りんご酒)
 スット(地名)……………▼セットまたはセート
 牧師……………▼司祭
 ゼウ、スウル号……………▼ドゥールスル号
 カフェ デュコンムルス……………▼カフェ・デュ・コメルス

翻案小説「小 帰国」(モーパッサン原作)。
小栗風葉作

明治期の小説家・小栗風葉おぐりふうよう(一八七五―一九二九、紅葉の門下生)には、モーパッサンの「帰郷」を下敷きにした翻案小説がある。題して「小 帰国」という(『新潮』五巻二号所収、明治39・8)。この短篇は(上)(中)(下)の三部構成になっている。

マルタン・レヴェスクの家は、「徳七とくしち後家の家」となっている。家は茅かやぶきである。後家の名はおまきという。その夫の徳七は、館山捕鯨会社たてやまの船乗りであったが、「しゃち」丸というノルウェーの捕鯨船にのり漁に出たきり、何のたよりもない。

おまきは足かけ九年ほど夫のかえりを待ったが、女房に先立たれた弥作という男といっしょになる。その後、おまきは二人の子を生んだ。

それからの話の展開は、モーパッサンの「帰郷」とおなじである。ある日のこと、うすぎたない老人が家のまわりをうろうろする。弥作がその怪しい男を家のなかに入れ、膳を出してか



ら、どこから来たのかと尋ねると、奥州の青森というところから歩いてきたという。

しばらくして、ふたたび弥作が、

——お前はこのあたりの生れか。

と聞くと、その男は

——あいさ……。

と答えた。飯をたべおえたその男は、顔をあげ、はじめて女房をみた。

おまさは、視線が合うと、しばらくクギづけになった。

——じゃもしやお前さまは……うちの人で……？

——あいさ……おれだ。

先の亭主・徳七は物語った。かれが雇われて乗ったノルウェーの捕鯨船は、北洋でクジラをとり、西シベリアのある島に寄港した。そのとき臨検にきたロシア人の役人ともん着を引きおこし、抵抗したかどで逮捕され、コマンドスキーという所の監獄に入れられた。その後ウラジオストク（ハバロスクの南南西六四〇キロ、港町）の刑務所にさいきんまでぶちこまれていた、と。

亡くなったはずの亭主の帰還によって大きな混乱が生じた。解決のめどがつきそうもなかったので、二人の亭主は那古寺の住持のところに行って知恵をかりることにした。弥作と徳七は肩をならべて外に出、町のなかほどにある飲屋のまえまで来ると、中に入って一杯やった。

この小説の終わりに、(Ma-passant)とあるが、これはMaupassantの作品に依拠して書いたことを暗示するものであろう。ともあれこの短篇は、つぎのような書き出しではじまっている。

(上)

海は全く^{うみ}屈^なき、波の音も^{なみ}懶^{もろ}さうな真昼^{まひる}時。真白^{ましろ}い片々^{はつはつ}の羽雲^{はうぐも}は、暴風^{はやて}に逐^おる、小鳥^{せうてう}のやう、碧青^{くわんのん}の空をスウと流れる。観音^{くわんのん}で名高^{なご}い那古^{なご}の町は、初^{はつ}夏の強^{なつ}い日射^{あひだ}に洗^{あら}出^だされて、其灰色^{かゐら}の瓦屋根^{かわら}が、滴^{しずた}るばかりの新緑^{しんりく}の間を透^すけて見える。

浜から上つて町の入口、俗に浜の弁天と呼ぶ其祠（小さなやしろ）に出る路傍に、住荒した一軒の荒屋がある——徳七後家の家なので。今では弥作と云ふ歴乎とした二度目の亭主があるのだが、呼馴れた名の徳七後家で今も通つて居る。棟の低い汐風に曝れた茅葺の小屋で、縦横に罫割の入った根内の三坪に足らぬ空地を、丹念に形ばかりの菜園畑に直して、胡瓜、分葱（ネギの変種）などを植付けてある。

ひとは日々の生活のなかで、いろいろなことを経験する。生きるということは、新しい経験をつむことにはかならない。職業によってはたえず危険がともなっているものもある。海は魔物である。漁夫や船乗りの生活がそれだが、かれらはときに不測の事故や遭難にあう。家族や関係者は、そのとき痛哭する。

雑誌『文庫』のバックナンバーを見ていたら、「漁夫の妻子」（相模 琴峯）という散文詩が目にとまった（『文庫』第三卷第一号所収、明治29・6）。それは漁に出た夫——父の安否を気づかう子どもの物語である。この作品をよみ味うと、漁に加わらず、家を守っている「イノック・アーデン」や「帰郷」に出てくる、家族の不安な心理をこっそりのぞくような気がする。

山のあなたに日はおちて、⁽¹⁾

(1) むこうに

身にぞしむなる あき風の、

浦曲々々をふきめぐる、⁽²⁾

(2) 海のはとり

渚になきし むれ千鳥、⁽³⁾

(3) 水辺で哀調をおびた声で鳴くちどり（背はうす黒く、腹は白色）

声をのこして あはち島、

すみ絵かくも かしらほかげ、

いとも のどかに かへるなり、

夫まつが 枝の家をさし。

いそべをしばし⁽⁴⁾ はなれつる、

(4) 海の波うちぎは

よもぎむぐらの ⁽⁵⁾ あばら家に、 柴 ^{しば} たく手をば ⁽⁶⁾ しばし止め、 夫の帰るを まつはたれ ⁽⁷⁾ あれし障 ^{しょう} 子の ⁽⁸⁾ やれめより、 外の方見れば かどべ ⁽⁹⁾ には、 父の帰りを まちわびて、 幼児のみぞ さびしげに。 妻子二人の まちわびて、 むねに浪立つ こゝろねを ⁽¹⁰⁾ ゆうげのけむりの きばより、 雲井 ⁽¹¹⁾ はるかに なくからす、 をのがふるすへ 帰るなり、 鳥さえ帰る 夕まぐれ ⁽¹²⁾ など 我が夫 ⁽¹³⁾ は 帰 ^{かえ} らざる、 など 我が父は きまさざる。	(5) もちぐさが生い茂った (6) かさかさの手 (7) 待っている者はだれであろうか。 (8) 破れたところ (9) 門のそと (10) きもち (11) 大空 (12) 夕ぐれ (13) 「何 ^{なに} と」の転化。なぜ
まち兼ね ^か つるや をさな子は、 いそべ ⁽¹⁴⁾ へいで、 をちこちと ⁽¹⁵⁾ くもをまもりつ ⁽¹⁶⁾ 浪をみつ、 けふ 夕ぐれに をそろしき、 はやてのきざし ⁽¹⁷⁾ ありとかや、 隣りのをちは いひけるを、 はやなみかぜ ⁽¹⁸⁾ の あれぬるに、 わが父など てきまさる。	(14) 海のはとり (15) あちらこちら (16) 雲をみつめる (17) 突風 (18) 荒波 疾風 ^{しふふう}

- (19) をりしもつきし その舟に、
もしや父上 居ますやと、
呼べど こたえも あらいそに、
立ちいでにしは あだしひと、
(20) あだしひと（他人）
(21) たづぬすがたも なくなくに、
ちから なぎさに うちふして、
またくる舟を よぶこどり、
(22) ひとむれ月に なきさけぶ。
ひとかたまりの月
(23) まもなく 遙かうなばらに、
ひなうた、かく うたひつる、
(24) ひろびろとした遠くの海
いなかびた歌、俗謡。
声はたしかに 父上よ、
(25) ますます
槽ごえも いとゞ いさましく、
(26) 見えはじめる
やがて 人かげ みえそめて、
(27) 応答のことば。「はい」
舟のかたちも あらはなり、
わが父上と よびぬれば、
を、と こたふる 声ゆたか。

むすび

文化七年（一八一〇）一月——江戸・市村座で上演された「心謎解色系」というのが、シェイクスピア劇が輸入された最初だという。しかもこの芝居が、『ロメオとジュリエット』の翻案（内容を改作したもの）である、といった空説（根拠のない説）が、昭和初期から戦後のこんにちま

で命脈を保っているのである。『ロメオとジュリエット』が、わが国に入ってきた経路（オランダ伝來說）がはっきりせぬまゝ、九〇年ちかい年月が経ってしまった。

筆者は外国文学の日本移入史への興味から、この問題について関心をもちつづけ、いまに至っている。そのうちだれか篤学の士があらわれて、移入のみちすじが明らかになることを期待していたが、まだそのような人は出ていないようだ。解明の一つの手がかりをうる方法は、長崎出島の商務員らの私的な日記・メモ・書簡や輸入本の目録などをしらべることであろう。

それらはいずれも手稿であるから、オランダ文の草体（くずし字）がよめねばならぬ。なまかじりのオランダ語の力では手にあまるものである。筆者は既刊のオランダ商館の訳本に、何かシェイクスピアについて言及はないか、すこし調べてみたが、捜し求めるような記述と出会うことができなかった。将来、日本とオランダの研究者によって、この問題が明らかになることを願うものである。

テニソンの「イノック・アーデン」とモーパッサンの「帰郷」との間には、影響関係が存在するように思われる。すなわち、後者が前者の作品をフランス語訳でよみ、そこから何らかの波動をうけ、模作をつくったということである。しかし、両者の接点——モーパッサンがテニソンのこの物語詩を知った時期については明らかにできない。ともあれモーパッサンは、伝承的逸事——死んだと思われた夫が、妻の再婚後に帰宅する——といった興味あるテーマを、ゾラやテニソンからあたえられたように思われる。

モーパッサンは、ある日突然、難波者とその家族のことを書くこうと思ったわけではなからう。ひとはペンをとって何かについて書くこうするとき、心を突きうごかされるものがなくてはならぬ。いわゆる刺激である。かれはゾラの連載小説「ジャック・ダムール」をよむことによって、^{テーマ}題をあたえられたと考えられ、ついでブルタニユーの漁夫にまつわる奇談やむかしフランス語訳でよんだ「イノック・アーデン」の話をおもいだし、物語の構想を練ったものであろう。「イノック・アーデン」や「帰郷」で用いられている字句——夫の帰りを十年待った——再婚後、子どもを二人もうけた——（遭難したとき）仲間二人と助かった——（帰国したとき）老衰していた——は、たまたま同じであることから、モーパッサンは、「イノック・アーデン」をよんでいたものと考えられる。これらの表現は、単に偶然の一致としてかたずけることができない現象である。

マージョリ・ボウデンの『フランスにおけるテニソン』（一九三〇年）は、同国における桂冠詩人の受容史——フランス人の目を通してみたテニソンを描いた労作だが、「イノック・アーデン」の影響について、こんな風にいつている。『「イノック・アーデン」』に示唆された作品をただひとつ見つけることができる。いうまでもなく、「イノック・アーデン」のテーマは伝統的なものであり、その変形物は、ブルタニユーの古歌

「船乗りが戦争から戻ったとき、もっとおだやかに……」やモーパッサンの「帰郷」という物語にもみられる（七八頁）。

出かせぎに出た夫——行方しれずとなった夫——遭難した夫——（戦死の公報のでた）出征兵士——らの帰郷と、留守宅の妻らの再婚をテーマとする悲劇は、わが国の古典文学や近代文学作品の題材^{テーマ}となっている。これは洋の東西を問わず、普遍的なテーマといえる。

「あずさ弓」（歌物語）……………伊勢物語に収録。

「案内して昔の寝所」（説話）……………井原西鶴の「懷硯」に収録。

「南部の人が見たも真言^{しんげん}」（説話）……………井原西鶴の「万の文反古」に収録。

「噂ばなし」……………永井荷風の『勲章』に収録。

「復員者の噂」……………井伏鱒二の作。『社会』に収録。

モーパッサンの「帰郷」の影響は、明治期の作家・小栗風葉（一八七五―一九二九）に波及し、かれはこの短篇を敷き写して^{説小}「帰国」を執筆した。これはモーパッサンの作品に似せてかいた『模倣』というべきか、翻案小説である。大すじにおいて「帰郷」とそっくりであり、固有名詞（地名、人名）だけは、すべて日本化されている。

文筆を業とする者が、創作力がおとろえ、真正な独創性が発揮できなくなったとき、ときに他人の作品をこっそりごまかし、じぶんの物とすることがある。これを評者は、翻案（焼き直し）とよんでいる。風葉の^{説小}「帰国」もまた翻案にはかならない。かれがなぜ翻案に手をつけたのか、その動機や目的はあきらからでないが、モーパッサンの「帰郷」（「怪しい男」）を与謝野・平野共訳でよんだか、あるいは英訳本でよみ、にわかに執筆欲が生じたものか。

「^{説小} 帰国」のさいごに、(Ma-p-s-t)とあるのは、おぼろげに原作の存在をしめすものであり、一応よりどころとした出典を断っている。

明治二十八年（一八九五）ごろ、翻案は好ましくないとして排斥^{はいせい}の意をあらわしたのは、『太陽』と『帝国文学』の記者であった。

いっときの成功を急ぐあまり、外国の小説を翻案する者は、他人のふんどしで相撲をとるようなものである。われわれは他人の意匠（かんがえ、くふう）を断りなく、わがものの顔に使うべきではないという（「翻案をやめよ」『太陽』第一巻第九号所収、明治27・12）。また翻訳は外国文学の紹介とすれば、翻案は、その横取り、創作の皮をかぶった文学の賊という（「翻訳の真相」『帝国文学』の「雑報」所収、明治31・4）。とにかく

翻案の是非をめぐっては、いつとき議論もあったが、のちに『太陽』は、創作のかたわら、文壇を活気づけるために翻案を不可とすべきでなく、われわれはそれを歓迎すべきであるとしている（『太陽』第三巻第一号、明治30・1）。

翻案の土台となっているものは、他人の作品である。が、このことから派生的な問題について管見をのべてみたい。それは学者と称せられる人たちの著述である。われわれはそうやすやすと独創性な、世間がみとめる研究を生みだすことができない。独創とは、じぶんの考えによって、新しく作りだした物の意だが、ひとからその価値をみとめてもらわねば、何の意味もない。

われわれはあるテーマについて何か書こうとするとき、関連文献や資料を用いるが、人によってはあれもこれもやたらと紙面につめ込むあまり、積載過重となり、身うごきできないことがある。でき上ったものは、布のはぎ合わせ、ごたまぜ仕事である。全体に流れる一本のふとい筋道があるかと思うと、じつはないのである。しかも論旨はあいまいであり、さっぱり意味が通じない、むちゃくちゃなものである。近年、大学の紀要にこのようなものが目につく。

それは研究というより、他人の述作の跡をまとめ、紹介しただけのものである。他人の料理はおいしいものである。他人にたよって物事をなすことほど楽なことはない。とくに人の目にふれぬ古書に埋没し、その説を伝えておけば学問となるというから罪つくりなことである。他人は生きた書庫、生きた蓄音機という（「緑陰放語」『帝国文学』所収）。

多くの書をよんで、それを自己流に解釈し、だれだれの所説はこうだといってみても、何ら学界に貢献するものではない。それは受け売りにすぎず、独創の見なきものである。まだしも我田引水（がでいんすい）（じぶんのつごうのよいようにいう）のほうがまだましだろう。筆者もまた他人の説とじぶんの意見を混和してものを書いている一人であるから、人のあらを非難できない。

一篇の小品、一冊の本が海をわたり、国境を越え、異国に入り、そこでその国のひとびとによって読み味われる。それが新たな感興（おもしろみ）を生み、文学者を刺激し、また別の作品をうむ。「心謎解色系」（鶴屋南北作）が、シェイクスピアの『ロメオとジュリエット』の翻案である、といった従来の空説の信ぴょう性については、残念ながら借用の証明にまで至らなかった。

十九世紀のイギリス文学の大詩人テニソンの「イノック・アーデン」とモーパッサンの「帰郷」との間には、希薄ではあるが、影響関係を感じ

られる。「帰郷」はさらに地球の裏側——極東の小国日本の文学者に感化をおよぼし、翻案小説を誕生させた。文学作品の力は、まことに広く、大きいといわねばならぬ。

注

- (1) 太田咲太郎訳『比較文学』（丸岡出版、昭和18・8）、一二三―一二五頁を参照。
- (2) ビエール・ブリュネル 共著 渡辺 洋訳『比較文学とは何か』（白水出版センター、昭和61・6）、一七八頁。
クロード・ビショワ
アンドレ・ミッシェル・ルソー
- (3) 杉本つとむ著『英文鑑——資料と研究』（ひつじ書房、平成5・8）、四頁。
- (4) 河竹繁俊校訂『鶴屋南北集』（地平社、昭和23・7）、二頁。
- (5) 本間久雄「大南北と『ロミオとジュリエット』」『新修シェークスピア全集 別冊 月刊特別附録』 沙翁復興 第二号 所収、昭和10・5。
- (6) 拙稿「文政三年のオランダ芝居——川原慶賀筆『阿蘭陀芝居巻』について」『社会志林』第52巻第2号所収、平成17・9。
- (7) 『通航一覽巻之二百五十——阿蘭陀国部十二』に、「司天監」の文字がみられる。
- (8) 「ヘンドリック・ドゥフ・ユニアの日記」（『オランダ商館日記』所収、雄松堂出版）および永積洋子訳『ドゥーフ日本回想録』（雄松堂出版、平成15・8）を参照。
- (9) 栗原福也訳『シーボルトの日本報告』（平凡社、平成21・3）、一八六頁。
- (10) 近藤弘幸「日本最初の『ロミオとジュリエット』——雑誌『喜楽の友』と小栗貞雄」『人文研紀要』所収、中央大学人文科学研究所、平成26・9。
- (11) たとえば *Romeo et Juliette*, Tragedie en cinq actes et en vers; par M. Ducis —— Représentée, pour la première fois, par les Comédiens Français, en 1772. N. B. Duchesne, Paris, 1789 といった翻訳がある。『ロメオとジュリエット』は、コメディーフランセーズ劇団によって、一七八九年（寛政元年）にパリで初めて上演された。
- (12) 小田千秋著『研究社英米文学評伝叢書 48——テニソン』（研究社、昭和14・5）、四―五頁。
- (13) *Enoch Arden*, by A. F. Tennyson, Effingham Maynard & Co., New York, 1884, p.191
- (14) *Alfred Lord Tennyson, A Memoir by his son* vol.II, Macmillan and Co., London, 1897, p.7
- (15) 注（13）の一九一頁。
- (16) 注（14）の六頁。

- (17) 注(14)の七頁。
- (18) 注(14)の五頁。
- (19) Adolphe Brisson: *L'Enfance et la Jeunesse de Maupassant*。この論文は Albert Lombroso: *Souvenirs sur Maupassant*, Bocca Frères, Rome, 1905 に収録されている。一三〇～一六五頁。一四二頁を参照。
- (20) 前掲書、一四二頁。
- (21) *L'Enfance et la Jeunesse de Maupassant — Détails inédits racontés à Mademoiselle Ray et au Docteur Balestre par Madame Laure de Maupassant*.
モーパッサンの母のこの談話筆記は、Albert Lombroso: “*Souvenirs sur Maupassant*” に収録されている。同書の三〇二頁のこの記事がある。
- (22) Albert Lombroso の編著の三〇三頁。
- (23) Maupassant: *Contes et Nouvelles*, II, Gallimard, Paris, 1979 の注——一三七九頁を参照。
- (24) Robert J. Niess: *Two manuscripts of Maupassant Le Retour and Le Champ d'Oliviers*. この論文は French Studies, A Quarterly Review, vol. VIII, Basil Blackwell, Oxford, 1954 に収録されている。
- (25) フランスにおける「イノック・アーデン」の翻訳は、『パリ評論』(一八六六・八・一五)にのったものが最初であるらしい。P・M^{エム}という頭文字をもつ人物が、散文に訳したものがそれである。二番目の翻訳は、ルシアン・ド・ラ・リーウの『翻訳の試み——テニソン、ロングフェロー』(この中に「イノック・アーデン」をふくむ)であり、一八七〇年にパリの Ch. Meyrueis から刊行された。三番目の翻訳は、一八七七年七月に『イギリス評論』にのったもので、訳者はグザヴィエ・マルミエである。
モーパッサンの「帰郷」は、一八八四年七月に『ゴローワ』紙に発表された作品であるが、かれがテニソンの「イノック・アーデン」仏訳をよんでいたとしたら、この三つの訳書のうちのどれかであろう。

注・Marjorie Bowden 著 Tennyson in France の「書誌」を参照。

主なる参考文献

- 太田咲太郎訳『比較文学』丸岡出版、昭和18・8。
マリウス・フランソワ・ギューヤール著『比較文学』白水社、昭和28・4。
福田陸太郎訳
- 矢野峰人著『比較文学——考察と資料』南雲堂、昭和31・3。
- 渡辺 洋訳『比較文学とは何か』泉社、昭和61・6。

- Engelsche Sprakunst*, door Lindley Murray, zesde druk, Zalt-Bommel, Joh. Noman en Zoon, 1852
- Theoretisch—Praktische Sprakunst der Engelsche taal*, door F. M. Cowan en A. B. Maates, derde druk, J. H. Gebhard & Comp, Amsterdam, 1864 (?)
- 渋川六蔵訳
大槻如電翻刻 『英文鑑』「謄写版」六合館、昭和3・12。
- 杉本つとむ著 『英文鑑——資料と研究』ひつじ書房、平成5・3。
- 河竹繁俊訂 『日本文学大成 第三十六卷 鶴屋南北集』地平社、昭和23・7。
- テニソン著
入江花錦訳 『テニソンの詩 エノック・アーデン』文学同志会、明治38・6。
- 富田義介訳注 『牧歌 漁村哀話』北星堂、昭和4・8。
- テニソン著
田部重治訳 『イーノック・アーデン 他三篇』角川書店、昭和26・10。
- Enoch Arden* by Alfred Tennyson, D. C. L., Poet-Laureate, Ticknor and Fields, Boston, 1865 (つねはちん絵入りの良書)
- Enoch Arden, etc.* by Alfred Tennyson, D. C. L., Poet-Laureate, Edward Moxon, London, 1864
- Enoch Arden*, by A. F. Tennyson, Eifingham Maynard & Co., New York, 1884
- Enoch Arden and In Memoriam*, annotated by A. F. Tennyson, edited by Hallam, Lord Tennyson, Macmillan and Co., London, 1909
- Alfred Lord Tennyson, A Memoir by his son Vol.I*, Macmillan and Co., London, 1897
- Tennyson and his friends*, edited by Hallam, Lord Tennyson, Macmillan and Co., London, 1911
- Enoch Arden* by Lord Tennyson, with introduction and notes by W. T. Webb, M. A, Macmillan and Co., London, 1917
- Marjorie Bowden, M. A: Tennyson in France, Manchester University Press, England, 1930
- 小西茂也 著 『モーパッサン』青磁社、昭和24・5。
- 大西忠雄 著 『モーパッサン』青磁社、昭和24・5。
- 川戸道昭 編 『明治翻訳文学』新聞雑誌編 32 『モーパッサン集 II』ナダ出版センター、平成11・12。
- 榎原貴教 編 『モーパッサンの生涯』新潮社、昭和48・10。
- アルマン・ラヌー著
河盛好蔵訳
大島利治訳 『モーパッサン全集』春陽堂書店、昭和40・9。
- Albert Lumbroso: *Souvenirs sur Maupassant*, Bocca Frères, Rome, 1905
- French Studies, A Quarterly Review, vol. VIII, Basil Blackwell, Oxford, 1954
- Guy de Maupassant: *Yvette*, Albin Michel, Paris, 1949
- Maupassant: *Boule de Suif et autres Contes normands*, introduction et notes par M.-C. Bancquart, Garnier Frères, Paris, 1971

Maupassant: *Contes et Nouvelles*, II, texte établi et annoté par Louis Forestier, Gallimard, Paris, 1979

『荷風全集 第19巻』岩波書店、昭和39・5。

朝比奈弘治訳『水車小屋攻撃 他七篇』岩波書店、平成27・10。

竹村 覚著『日本英学発達史』昭和8・9発行、昭和57・11復刻版発行、名著普及会。

坪内雄蔵訳『ロミオとジュリエット』早稲田大学出版部、明治43・9。

沢村寅二郎訳注『ロメオとジュリエット』研究社、昭和28・5。

The Works of William Shakespeare, edited by Charles Knight, The John C. Winston Co., Chicago, [刊行年不詳] (さし絵入り本)

マルグリット・デュラス
ジェラルド・ジャロロ 著 『かくも長き不在』筑摩書房、昭和45・11。
原上 脩訳

暉竣康隆訳注『現代語訳 西鶴全集 第7巻 西鶴諸国ばなし』小学館、昭和61・11。

田辺聖子訳『現代語訳 竹取物語 伊勢物語』岩波書店、平成26・1。

『荷風全集 第10巻』岩波書店、昭和39・4。

『井伏鱒二 自選全集 第3巻』新潮社、昭和60・12。

『文の友』第十七号、大倉書店、明治39・6。

『雄弁』第二卷第十二号、明治44・12。

『文庫』第三卷第一号、明治29・6。